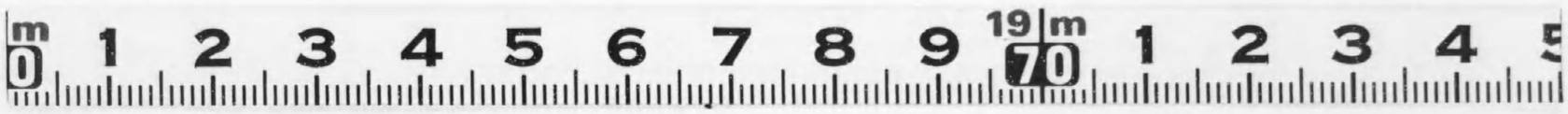
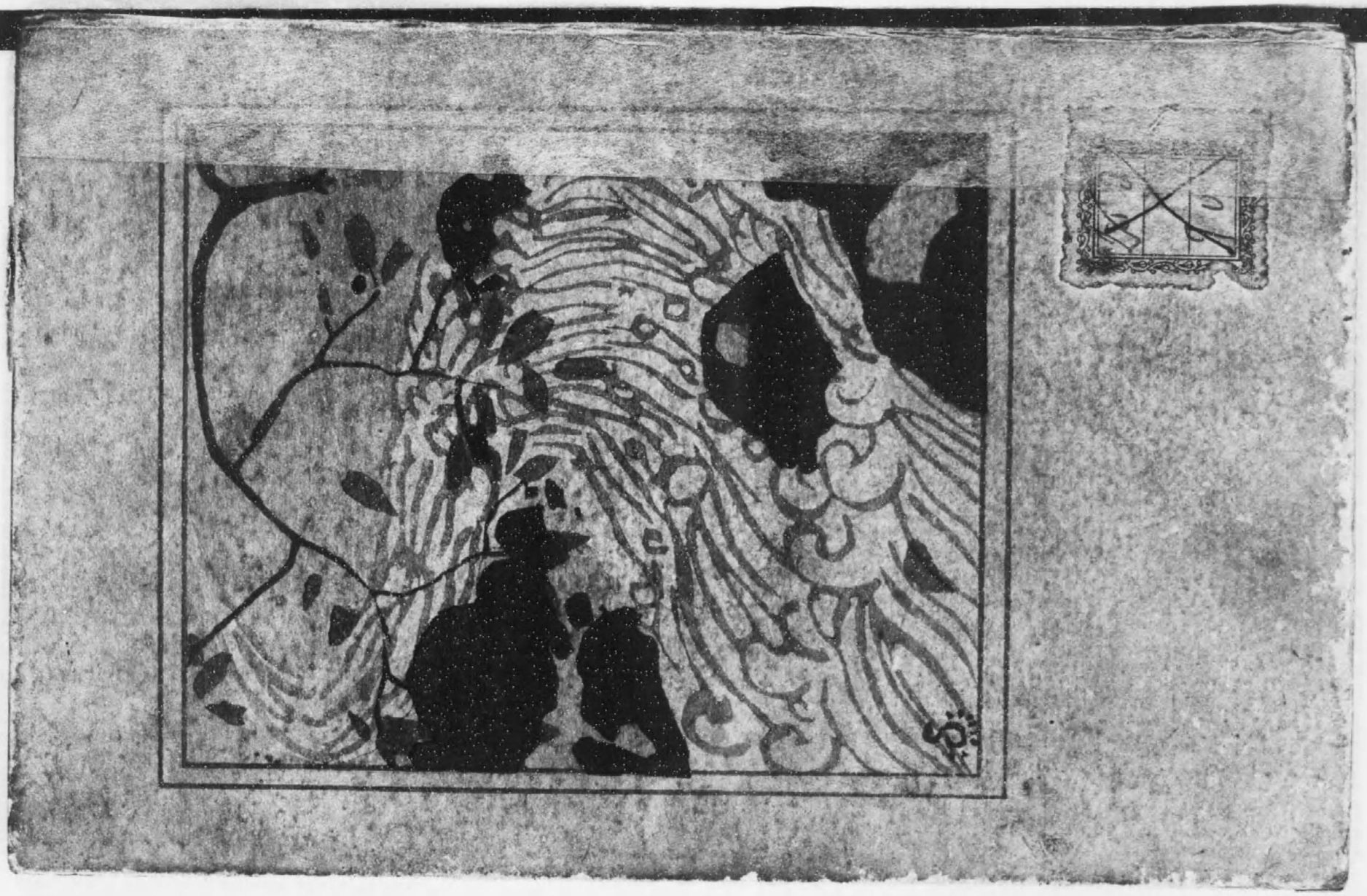
賀



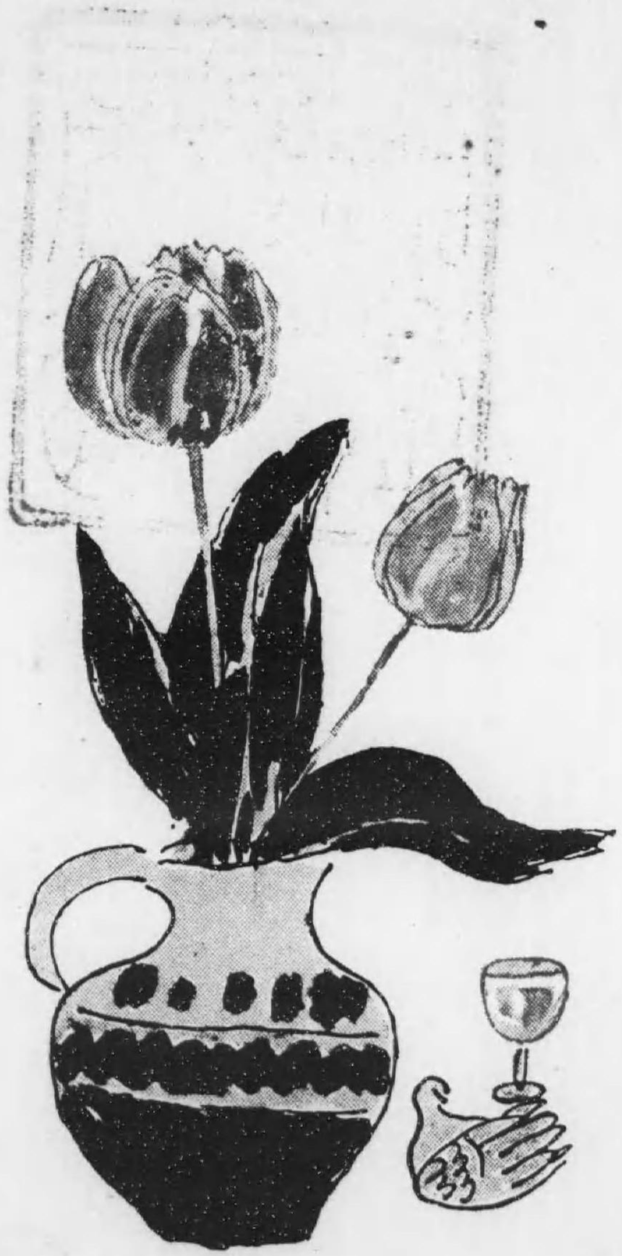



# 奔流

德田秋聲

□新潮社版□

大正
5. 3. 15
内交



# 奔流

徳田秋聲作

# 一

その頃新橋の或家にゐた照子は、そこにゐる多くの女達と同じやうな商賣に働くつもりで、十六になつたばかりの體を賣つてその家へ住込むことになつてから、もう半歳弱の月日を過して來たのであつたが、本郷の方のある病院に入つてゐる一人の朋輩を見舞に來い〳〵してゐるうちに、思ひがけない賓縁ができて、ふと今の岩辻と云ふ富有者に愛せられる體になつたのであつた。

北國のある都會に產れた照子は、可也の門地にあつたその家が零落してから、母親と二人東京へ出て來て、それまで妻戀の力に裏屋住ひをしてゐるうちに、ある周旋屋の手から、そんな社會へ渡つて行つたのであつた。照子は稚い時分から優れた縹致を持てゐたが、藝といつては糸道が少しばかりあいてゐたきりであつたので、今遽にそんな社會へおちて來ても、賣ものにせらるゝ前に、藝事を仕込まれなければならなか



つた。陽氣な家のなかで、可なり苦しい月日を送つてゐた照子は、婦人病で入院してゐる、姉さん株の一人であつた、その患者のところへ、何彼の用達に來てゐるうちに、國の眤みで、その頃そこに醫員をしてゐる一人の男のあることを思ひ出して、ある日歸りがけに小使から面會を申込んでみたのであつた。そして澤と云ふその男の智慧で、岩辻へ渉りあふことになつたのであつた。

それは秋の初めで、春の末からそんな社會の空氣のなかに浸つてゐた照子は、毛並のいゝ髪を潰し島田に結つて、紫縮緬の羽織などをきて、すつかり大人ぶつてゐた。

「澤さん、素破らしい美人が訪ねて來ましたぜ、大したもんですぜ。」

氣輕な小使にさう言はれて、應接室へ出て來た澤の前に、照子は椅子にも落着かぬさまで、胸をおど〳〵させてゐた。國では近所同士で、お莨盆に結つた彼女は、よく澤の膝に抱かれたり、脊に負さつたりして來たのであつたが、それからもう十幾年と云ふ月日がたつてゐた。

「私は御近所にをりました山村てるでございます。」

人ちがひのやうな氣がしてゐた澤は、さう言はれてやつと朧ろげな彼女の幼顔を、その美しい目鼻立に思ひ浮べることができた。

「うむ、あんたが照さんだつたのかえ。」

白い診察着をきてゐた澤は、直に自分の近所に、母子で侘しく暮してゐた照子のその時分を思ひ出した。古くから住馴れた荒れた屋敷町のその家の様子や、築土に圍まれた庭の面影も目に浮んできた。

澤はそれまでに、今の照子の住込んでゐる家へも、診察にいつたことがあつた。

「そんな事をしずとも、如何かなりさうなものぢやないか。誰か知邊はないのか。」

澤は悲しげにしてゐる照子に訊ねたりした。

十九銀行のつまらないところに勤めてゐる、ある男などを、照子は昔の知邊の一人に數へることができたが、そこで羽振のいゝ岩辻と云ふ男が、以前自分の父親から、



多少の恩を受けてゐることをも、母親から聞知つてゐた。

「それも久しく音信をしませんのですから、こんなおはづかしい境涯になつて、お訪ねするのも何だか厭ですから。」

しかし照子が、その銀行の下級にゐる第一の男の紹介で、下谷の方に、立派な住居を構へてゐる岩辻の家へたづねて行つたのは、それから間もなくであつた。

ボーイから經歴つて、その頃その銀行の主腦者の一人になつてゐた岩辻の屋敷は、二長町の或靜な通りの方にあつた。照子は岩辻との約束で、別に母子の住ふやうな家を一軒配はれるまでに、幾度となく煉瓦塀を取繞らしたその屋敷へ訪ねていつた。

## 二

そんな社會へ入るまでに、一度は山國の或避暑地へしばらく體を沈めたりした覺えのある照子に取つては、彼女の一身を引受けるために、その時岩辻の持出した條件が、

さほど奇怪にも響かなかつたが、やつぱり心苦しい壓迫を感じないではゐられなかつた。

「あなたの一身上についちや、同郷人の松永から詳しいことは聞いてをるのだがね。」

照子が初めてその應接室で會つたときから、岩辻は思つてゐたよりか、安つぽい、しかし打解けた安易な調子で、話しかけた。彼は照子が自分の產れ故郷で善く見かけるやうな型の男の一人で、頭髪を角刈めいた五分に刈つて、髭も生さず、手に指環などをはめて、廣袖の浴衣のうへにぐるぐる捲いた絞高の縮緬の兵兒帶を、職人風に前の方で結へ目の瘤を拵へてゐた。

住込んでゐる家から足をぬかせられるまでに、照子は岩辻の條件を容れるか否かについて、幾度躊躇したか知れなかつた。銀行から四五町離れた或横町に、一軒借りてくれたその家へ、母子で落着くことになつてからも、照子は強ひつけられたやうな自分の運命が呪はしく思へた。



岩辻が自分で見つけたその家は、下が三室に二階が二室あつた。近所は小さい會社の事務所のやうなものや、女名前の標札の出た小綺麗な仕舞屋や、通りの古舗の隱居でも住んでゐさうな物靜な家ばかりであつた。それまで四谷の方の親類にあづかつてゐた母親と、こゝでまた暫くぶりで自分の新しい世帶をもつことになつた照子は、自分の紋のついた羽織をひつかけて、近所へ引越の挨拶にまはつたり、入用な世帶道具を買ひ集めに出たりするのに、氣がまぎれて、三日四日と浮々した日がたつていつた。

岩辻は銀行がひけると、きつとそこへ腕車をつけることにしてゐたが、照子のために山村てると書いた標札を自身鐵槌をもつて、よく拭込んである格子戸の上へ打つけたり、自分の家から取寄せた軸ものや、掛花活を飾りつけたりするのを當分の仕事にしてゐた。

「あの人も舊を言へば、私達よりずつと格が下だつたのにね。」

ほとんど照子一人の考へで取決められたやうな、今の娘の身分に哀しい飽足りなさを感じてゐる母親は、二人差向ひになると、まだどこかに荆立つてゐるやうな昔氣質な不滿が口へ出た。

國にゐるうちにも、母子は昔からの知合や、四谷の叔母などへ、重ね〴〵の合力を頼んだりして、其以上扶助を仰ぐこともできないやうなはめに陷ちてゐた。それに宗教上の仕事にたづさはつてゐる叔母もその時分傾向がそんなに裕かでもなかつた。照子は少許り纏まつた金の入用のあつた一昨年の夏に、ある知つた人の周旋で、山國の避暑地のホテルへ給仕女にといつてつれられて行つたことがあつた。その頃には、東京まで持つて來た昔からの持物なども、悉皆賣拂つて、手に殘つてゐるものといつては、櫛一つなかつた。母親が大切にしてゐた古い觀音の像や、由緒のある脇差のやうなものも、どこかの古道具屋の手に渡つてしまつてゐた。

照子は、何程も母親の手につかない金のために、その山國の町のある旅籠屋とも、



飲食店とも知れないやうな家に、二月の餘も留められてゐた。望んでゐたやうな口は、忙しい夏場を過ぎやうとしてゐるホテルが閑になりかけてゐたゝめに、無くなつて、照子は周旋人につれられていつた最初の家に引かゝることになつたのであつた。

## 三

秋風が直にその町を訪れた。

照子はホテルに口さへあれば、給仕女として西洋人の前へ偶に出るだけで、骨のをれるやうな仕事に働く必要はないと云ふ約束で、そこへ連れられて來たのであつた。その上貰ひなども澤山あると云ふのが、彼女の心を動かしたのであつたが、その豫想がはづれて、口が見つかるまでといふので、その家に留められることになつたのであつた。

その家には外に女が二人もあつた。上さんは五十近い、東京の樣子なども能く知つ

た女であつた。町の足袋屋へ職人として通つてゐる二十三四の子息も一人あつた。客は大抵町の居圍の若い衆などで、旅館に泊つてゐる旅客で、飲みに來る輩も偶にはあつた。

照子はそれらの客の前へ出て、お酌をすることを、女中たちから言含められたが、男の前へなど出たことのない彼女は、酒の匂ひなどのする二階の部屋へ入つて行くのが、厭でたまらなかつた。

照子を見ようとする客が、それからそれへと聞傳へて、そこの二階へ飲みにやつて來た。その中には近くの村にゐる村長などがあつた。町の大きな旅館の番頭などに案内されてやつて來る、東京の客などもあつた。背後を流れてゐる物凄い激流が、白い石のごろ〳〵してゐる河原の片隅を流れて、河上に峭々重なりあつてゐる荒い山の姿が、その部屋から一目に見わたされた。見てゐても膽が冷えるやうな河ぞひの崖際に、人家がみえたり、馱馬が通つて行つたりした。日が暮れると、廣い河原の空に稲



妻が光つて、高い山が崩れかゝつて來さうにみえた。

町はどこを見ても、旅客が雜沓してゐた。日がたつても、家の人たちに昵むことのできない照子は、外へ出られないやうに、その人たちからそれとなく見張をされたが、日の暮方などには、浴衣姿で表へ出て見たりした。そして町を歩いてゐる異郷の人の姿などに、果敢ない哀愁を唆られるのであつた。

直に照子は呼込まれて、銚子を二階へ運ぶやうに吩咐かつた。

髪を束髪に結つて、お嬢さん風につくつてゐた照子は、銚子を持つて、古びた段梯子をあがつて行つたが、それを障子の陰から部屋のなかへ入れると、急いでまた裏梯子から下へおりていつた。

暫くすると、客は二階から手を鳴して照子を呼んだ。

女たちに搜しだされて、照子はまた二階へ逐あげられて行つた。そして否應なしに客の前へ出てお酌をさせられた。

おど〳〵して俛いてゐる照子は、客から色々の質問を受けた。照子は何にも知らない風に、母親が金をもつてつれに來るまで、この家に引かゝつてゐなければならぬ自分の身のうへを話したが、そこの養女か何ぞのやうに、お上から吹聽されてゐることが、客の口吻でもわかつた。

二度も三度も飲みに來て、顏を知つてゐるその男は、神戸から來て、商用かたゞやつて來た東京から、こゝへ遊びに來て、ある旅館に逗留してゐるのであつたが、身裝や持物などで、金まはりの好い實業家だと云ふことが、照子にも想像ができた。彼は手に指環などをはめて、ぴか〳〵した風をしてゐた。年は二十四であつた。

「ぢや東京へ歸りたいと思ふでせう。」

餘り酒を飲まないその男は、照子にたづねた。

「え、それは歸りたうございます。」

「ぢや如何です、私が歸るとき一緒に行きませんか。」



照子はもぢ〳〵してゐた。

「あんたが神戸へ來てくれる氣なら、私はあんたの體を引受けても可いんです。」男はさうも言つた。

## 四

その男が、照子が借りてゐる金を立替へて、彼女をそこから足をぬかせることに、お上を納得させたのは、照子がこゝへ來てからまだ見る際もなかつた御廟を見物させられたり、駕籠で瀑や湖水のある山上の勝景を見に連れだされたりして、二人の心が可也打釋けて來てからであつた。

美しい湖水に臨んだ二階の一室で、半日ばかり湯に入つたり、飲食をしてゐる間にも、男は照子の心さへきまれば、明日にも東京へ歸つて、母親に逢つて直接話を取決めたいやうに言つてゐた。

「お湯に一緒に入りませう。」
女中が浴衣をもつて來たとき、照子は男にさう言つて誘はれたが、やつぱりもぢもぢしてゐて、應じなかつた。手摺際へ出て、碧い淋しい水を眺めてゐる彼女の睫毛の長い美しい目のうちに、憂愁の色が漂つてゐた。
照子は何を言はれても、御母さんさへ承知ならばと、單純な應答をしてゐるきりであつた。
「あんたの心は、私にはよく判りませんな。」
男は一緒に御飯をたべてゐるときもさう言つて笑つてゐた。
「とにかく東京へ行つたら、御母さんに逢つて直接話をしませう。あすこの家は、私がお金をだして、綺麗に片をつけてしまひます。そら貴女も承知でんな。」
「え。」照子は頷いた。
「神戸へ行きさへすれば、如何にでもなりますさ。御母さんの一人や二人面倒を見る



くらゐ、何でもありやしません。」
男はさうも言つてゐた。
照子が自分を手放すのを厭がつてゐるお上から暇を取つて、男の逗留してゐた宿へ引取られたのは、男がそこを立つと云ふ前の晩であつた。頽廢の氣の漂つたその家を出られると云ふことだけでも、照子は氣がせいせいするやうであつた。足袋の職人をしてゐるお上の子息から脱れたと云ふことも、彼女の心を安易にしたが、全くは男を信頼する氣にもなれなかつた。可也な額の金を立替へてもらつたところなどが一層彼女を大きな不安に陷いれた。
惡夢にうなされてゐるやうな、出発前の用心ぶかい一夜を、照子はその一室で過した。
「あんたの氣心は、私にはさつぱり解りませんな。」
男はさういつて、枕のうへに起きあがりながら、煙をふかしてゐた。照子はその傍

で、今までゐた宿でもしなければならなかつたやうに、心を研すまして、體をすくめてゐた。照子はどうかすると、前の家の子息から、同じやうな壓迫を感じさせられてゐた、蒼白い愚鈍なその顏が、ふと夜なかに目のさめた照子の枕頭に見えたりした。

「神戸や大阪の女子でしたら、お金さへ出せば、そんな變屈なことなんざ言つてやしませんがな。」

男はさうも言つて、いら〳〵しさうに寢返りをうつてゐた。

心苦しい時が、十時……十二時とたつて行つた。

金づかひなどの荒いところから、賊の嫌疑で、その晩の一時頃に、拘引に出むいて來た警吏のために、警察へ引張られて行つたりしたことが、一層照子の心をおど〳〵させた。

警察の提灯が、二人の寢顏のうへに差つけられたとき、照子はやつとうと〳〵と微睡みかけてゐた。照子は自分がどんな女だと思はれてゐるかと云ふ不安と、男がどん



な人間であるかゞ、その刹那に解つたその恐怖と、二重の疑惑に襲はれつゝ、引れていつた。

町の警察署の二階の一室で、簡短な質問を受けた照子の耳に、暗い下の留置所へ入れられて、腹立しげに言爭つてゐる、男の高聲が時々傳はつて來た。薄ら寒いその部屋には、火がかん〳〵熾つてゐた。硝子窓の外にみえる木の繁みには、深い霧が立迷つてゐた。

## 五

そんな偶然の出來事が、一層二人を結びつける機緣となつて、翌日の午後そこから解放されると、男は照子をつれて、急いでその町を立つた。

男の身元が悉皆解るまで、照子は警察の二階に閉籠められて、鬱いでゐたのであつたが、汽車に乘つてからも、男が立替へた金で、悉皆自分を所有して了つたやうに舉

動ふのが、腹立しかつた。
男の定宿は、新橋の方にあつた。照子はそこへつくと、その時神戸の店から來合せてゐた番頭の目にふれないやうに、下の奥まつた別室に入れられたが、家庭の紛紜から可也な金を持出して、家を飛出して來てゐたその男が、迎へのものにつれられて、新橋を立つまでに、母親が苦しい工面をして拵へた幾許かの金で、照子はとにかく家へ取戻されることになつた。
僅か三四十圓ばかりの其金が、照子が今の社會へ體を沈める前借のやうなものになつてしまつたのであつたが、照子が母親の入智慧で、その男に神戸行を斷つてから、話が綺麗にまとまるまでには、母子はこれまで經驗したことのない苦勞をしたのであつた。
「お前の思慮なしにも惘れてしまふぢやないか。」
最初照子からの使をうけてあたふた宿へやつて來たとき、母親はさう言つて、泣い



てゐる照子を詰つた。
「自分の體を何と思つてゐるんでせう。お金さへ出してくれゝば、誰の言ふことでも聽いてどこへでも行つてしまふ氣なんでせうか。」
母親はさうもいつて、まだ孰ともきまらずにゐる、娘の惑ひを捂しがつた。それで金策をするため一兩日の猶豫を母親は男と約束しておいて、照子をおいて歸つて行つたのであつたが、近所で知合つてゐる或女の手から、急場を救ふためのそんな口がふと見つかつたのであつた。
岩辻へ引取られる時も、母親は蔭でぶつ〳〵小言を言つてゐたが、やつぱり自然の成行に引摺られて行くよりほか爲方がなかつた。
「昔のことなんか言つたつて、それあ駄目ですよ。」
照子は今迄ゐた社會の空氣などには、迚も同化して行けさうもなかつた自分の心持などを考へながら、母親に反抗したが、同じやうな哀愁が、鏡に向つたり、箸を持つ

たりしてゐる時などに、ふと彼女の心を曇らした。二十の餘も年のちがふ男の所有になつてゐることを考へるだけでも、母親の前に、男に侍づいてゐる自分を見られるのが憚られた。

本宅の方へ出入りする呉服屋の車が、こゝの門へもつけられて、冬物の支度などに取かゝる時分には、夏中窶れほそつてゐた照子の體にも、めつきり肉がついて、顏の色澤も鮮かになつて來た。照子と母親とは、長火鉢の前に坐つてゐる岩辻の傍で、反物の品さだめに餘念がなかつたが、照子は自分の好みで、派手な柄合の絲織の袷袍などを、岩辻のために見立てたりするほどに、自由な心持になつてゐた。

「それぢやこれを一匹取つてお前と對にしよう。」

岩辻は反物を手に取あげて、にこ〳〵してゐたが、初めてその應接室で逢つた時から見ると、彼は見違へるほど身綺麗になつてゐた。上の方で少し地肌の透きかゝつてゐる頭髪がいつもきちんと櫛の目を立てゝ、剃たての青髯のあとがつる〳〵してゐ



た。その硬い髭にさはることすら、可怖いやうな氣のされる女の初々しさが、一層若やいで來た男の心を惹きつけた。

## 六

思ひがけない時間に、ふと車をつけたりして、岩辻がやつて來ると、照子はいつもおど〳〵して機嫌のいゝ顏を見せることも出來ないことが間々あつたが、此頃ではその時刻が自然に豫覺されるやうな氣がして、誰も聞つけないやうな車の音に、ふと敏い聽耳が立つた。子供のをり肋膜を患つたとき藥ぎらひな彼女は服藥の時間が來ると、その匂ひに胸がむかついたことを覺えてゐるが、岩辻がゆつくり構へてゐる晩などには、それと同じやうな厭な思ひが、彼女の胸を塞らせた。岩辻が餘計もいけない酒に眞赤になつて、二階の座敷にしかれた寢床に横はつてからも、照子は男の前では箸を取る氣にもなれなかつた御膳の前に、いつまでも母親と差向ひで坐つてゐて、そこを

離れるのが辛くて爲方がなかつたが、慣れてくると、男の傍で物を食べたり、話をしたりすることが、寧ろ自由なやうな氣がした。

「あの人も、ちつと酒でも飲めたら話がはづむだらうに、お金を拵へる人はちがつたもんだね。」

岩辻のゐないところで、時々殘つた銚子を、自分の前に引寄せて、一本やそこいらの酒は平氣で飲める母親は、さういつて物足りながつてゐた。

酒を飲んでゐる間も、岩辻の頭腦は經濟界のことや銀行を離れなかつた。こゝの家政のことや、夫人の世帶持の上手なことなどが、重なる話題であつた。自分が書生をしてゐた頃のことや、銀行で勤めあげた苦心談なども、絶えず彼の口から出た。

照子はまだ紹介されたことのないその夫人のことを、時々彼の口から聞されてゐたが、岩辻がまだ安い月給で、てく〳〵銀行通ひをしてゐる頃にゐた、神田のある小さい下宿屋の貰ひ娘であつた彼女を、ある男と張合つた時の話や、初めてその女と世帶



を持つた頃の話などで、その女の樣子がほゞ想像された。

「とにかく、私が今の地位にのぼつて、月九圓の貸家から、あんな屋敷に住む身分になつたのも、一つは彼の心掛がよかつたからにも因る。悲しいことには、あれには子種がない。他に何にも不足はないが、それだけが不足だ。」

岩辻は母親をも傍においてそんな事を言つて聽せた。

「まあ人間は心掛が肝腎だよ。てるなどは苦勞をしたといつても、まだ年が若いから、御母さんに確かりやつてもらはなくちや困る。」

岩辻はさうも言つて、自慢の莨入を取あげて、莨をふかしてゐたが、母親にも照子にも、そんな話は餘り耳に入らなかつた。

「奥さんと此方と一つにされても困りますよ。あんな事をいつて、あの人はほんとに私たちを世話する氣やら否やら。」

母親はどうかすると、ひどく失望したやうな顏をしてゐたが、日光の場合と同じや

うに、心の動き易い照子が、次第に男に狎昵んでくるのが、飽足りなかつた。確りした細君に、家に頑張られてゐては、自分たちの行末が、とても安全に行かないやうな氣がしてゐた。同じ娘の體を賣るなら、一時に纏まつた金に有附く機會の多い、今迄の社會にゐた方が、優であつたとも思へた。

照子は母親の機嫌を取るために、好きな酒も默つて過させてゐたが、物哀しいやうな氣がむしやくしやして來て、俛いて火箸で字をかいてゐる灰や火が、涙の入染んだ目に、もぢやぐしして見えた。

「さう言つたつて、思ひどほりに行きやしませんよ。それは御母さんの愚痴といふものです。」

照子も一つ二つ口をつけた酒に、ほんのり紅くなつた目蓋を、袖口でおさへながら、そこを離れていつた。



## 七

泊つたときには、朝の九時か十時頃に、新聞の相場附などに脱目のない目を通しながら、滋養物などの朝の飲食をすまして、そこから銀行へ行くのを例としてゐる岩辻は、照子の下へおりて行く頃には、日のさすの知ららずに、まだ黄色い顏をして眠つてゐた。

火鉢の傍で、一人退屈さうにしてゐる母親と、朝飯を食べるために、照子は顏や髪などのくづれた姿で、そつと下へおりていくと、寒くなつてから置くことになつた女中に湯などを汲んでもらつて、朝日の差込んでゐる濡縁で、洗水を使ふことにしてゐた。岩辻と一緒に、近所の緣日で買つて來た、鉢植の菊がもうすがれて、素足であるく板敷が冷々してゐた。

照子は金盥の湯のなかに白く透徹つてみえる、細い指頭を眺めながら、昨夜も子を

ほしがつてゐた岩辻の言などをぼんやり思ひ出してゐた。二十年弱も一緒に暮して來た妻にすらない彼の子供を、自分に産めやうとは望んでも見なかつたが、さうすれば家を一軒建てゝやると言つたことには、心が惹かれた。

鏡の前で、鬢の形を直したり、顔を作つたりしてから、長火鉢の前にすわると、照子は今までゐた家で見たやうに、灰などを綺麗に均して、縁や周囲へ拭巾をかけた。

「あの人は綺麗ずきだから、お母さんのやうに何かを汚くしておいちや駄目」。

母親は默つてみてゐたが、襠袍を着て片膝を立てゝゐる娘の、おそろしく大人ぶつて來た顔容が、物希しく眺められた。十年も前に良人に死別れてから、娘と二人限で暮して來た彼女は、爲ることもなしに、家や家財を貪喰にして、何等かの幸運を夢みつゝ、終に知合の多い土地を引拂つて來たのであつたが、實際行き當つてみた、現在の娘の身のうへが飽足りなくて、岩辻といふ男を、心から好く氣にはなれなかつた。

「あの人だつて、そんなに解らない人でもないのよ。子供ができれば、本宅の方へも



自由に出入りができるし、家も一軒建てゝくれるといつてゐるから。」

岩辻が歸つてから、照子は燥いだやうな氣持で、縫ひかけてあつた長襦袢を、押入から取出して、明るいところへ針箱を持出しながら、母親に話しかけた。

「それは然うだらうよ。あの人も一つはそれが目的だらうからね。」

母親も傍へ來て、すんなりした照子の長い膝の上に垂された、友禪縮緬の片を引張つてみたりしてゐた。

「だけど私に子供ができるでせうか。」

照子は二人にできる赤子が、どんな子であるかを想像しながら、呟いた。

岩辻の男振の品評などが、二人のあひだに出てゐた。

照子は東京へ來たてに住んでゐた家の近所で、ふと眤みになつた梅村といふ、同郷の美しい青年のことを、その時も憶出してゐた。ちやうど自分と同じに、母親と二人きりでゐたその青年は、自分より三つ四つ年上であつた。醫者になるつもりで、その

勉強をしてゐたが、何うしたのか、不意に叔父が辯護士をしてゐる大阪の方へ立つて行つたのは、照子が日光へ行く年の春であつた。梅村からは、行つてから二度ばかり葉書が來たが、一度返辭を出したきりで、音信が絶えてしまつた。

まだ田舍訛の取れない頃から、眞の一年弱の往來であつたが、母子がそこを引拂つて行つた時には、失望と悲哀が彼女の心に、淡く入染みだしてゐた。

照子は神戸の男が、神戸行を勸めたときも、その男のゐる大阪の土地を憶出してゐたが、こゝへ來てからも、時々その幻を目に浮べてゐた。

## 八

照子が豫想どほり、そんな家を普請してもらへたのは、それから三年目の秋であつたが、それまでにも一度、櫻木町の方で、貸金の抵當流れになつた家で、足掛二年も暮したことがあつた。



そこは公園に近い閑靜な住居で、近所隣の煩い格子戸作の町家を鬱陶しがつてゐた母親の氣に入つたゞけに、門や庭がゆつくり取つてあつた。疊數も三十疊は敷けた。

常磐木の靑々した庭に臨んで隱居所じみた懸離れた部屋などがあつて、母親はそこへ自分の寢道具や、昔から持傳へてゐる系圖や書類や、死んだ人の命日の覺書などを入れた手函のやうなものを持込んでゐたが、照子もどこを見ても、陰鬱な木の影の這込んでゐるやうな部屋々々が、子供のをり住んでゐた田舍の薄暗い家が思ひ出せるやうで、可懷かつた。

最初の家へ落着いたときには、出代りの女中か何かのやうに貧しかつた荷物は、しばらくの間に荷車に四五臺も積まれるほど殖えてゐた。いつも何一つすることもない照子は、荷物が持込まれる忙しい家のなかで、ぞろりとした姿をして、物珍らしさうに、時々箪笥へ手をかけなどしてゐたが、いつとはなしにそんな家に住はせられることになつた自分の現在が、不思議のやうに思へた。少し許りの金で、日光で苦しん

でゐた頃の、自分の心持も可笑かつた。
「この部屋を一つ貰へば澤山だよ。私などはもう濟んでしまつた人間だもの。」
母親はさう言つて離房の床の前に坐つて見たり、押入れの立つけを氣にしたりしてゐたが、寒さに弱い身體の衰へが目についた。岩辻に對する反感もいくらか薄らいでゐた。
暮から春へかけて、身裝の立派にできた照子は、時々岩辻と一緒に、外へ遊びに出て飲食をしたり、彼の好きな音曲を聞きに連出されたりして、浮々した日を送ることが多かつた。母親も偶には女中をつけられて近所の寄席へ行つたり、照子につれられて、食物屋の門を潜つたりしたが、自分の賴る子供が、女の照子一人であるのが心寂しかつた。幼少のをり腦膜炎で取られた男の子が時々憶ひ出された。
「二十年も三十年も前に死んだ人のことなんか思出したつて、何になるものですか。私さへ丈夫でゐれば、些とも心配することないぢやありませんか。」



自分に考へてみようとも思はぬ兄のことを言出されると、照子は腹立しさうに言つたが、自分に理解を持たない娘の心持が、また彼女には賴りなかつた。
「子をもつてみない人には、親の心なんかわからないよ。」
母親はさうも言つて、笑つた。
「岩辻だつて、子供がないから、何彼につけ思遣が薄いといふやうなものでね。」
母親はまた岩辻の方へ觸れていかうとしたが、それが段々自分の立場を狹めていくやうに思へて、強ひて壓つけるやうにしてゐたのであつた。
「折角廣い家へ來て、そんな狹いところへ入らないだつて、何處にでもゐたら可いぢやないの。」
照子は移つて來ても、浮々しない母親を飽足りなく思つたが、時々溜息をついてゐるやうな彼女の心持が、いくらか理解されて來るやうにも思へた。
近くの木立に顫へてゐる、上野の鐘の音が、七時をうつ頃には、家のなかがあらか

た片づいてゐた。

## 九

その晩ちよつと引越しの様子を見に來た岩辻は、そこが出入に氣のおけない片側町であるのが氣に入つた。

「こゝなら謠をうたつても、近所の迷惑になる氣遣はない。それに何處からも見られる心配がなくて可い。」

彼はランプを持つて、自分の美しい愛物を祕めておく場所の、間取の工合や戸締などを見てあるきながら、照子に言つた。

「お前の田舍の家だつて、これに二間も廣いくらゐのものだ。木口や手間のかゝつてゐる點は、迚も田舍の建物と比べものになりやしない。」

彼はさう言つて、まだ落着かない茶の間の方へ來て、長火鉢の前に坐つてみたが、



臺所がごたゞしてゐるので、結局外で何か食べようと言出した。

家にゐれば、羽織をぬぎたいやうな晩で、池の畔の廣みへ出ると、向側に見える無數の明りが、しつとりした潤ひを見せ、曇んだ空からは、暈のかゝつた月影が朧に照してゐたが、風の肌觸はまだ寒かつた。

照子はちよつと髪や顏を直して、餘所ゆきの指環をはめ、コオトを引かけて出て來たが、水彩畫をでも見るやうな、靜かな池の畔の夜景が、夢のやうに目に映つた。

照子はこの正月には、暖かい或海邊の溫泉へ、二晩泊で連れられて行つたりして、岩辻と一緒に歩く機會は多かつたが、二人きりでゐることは、矢張氣塞りのやうで、岩辻がかけてくれる甘い辭や、優しい仕草に、頭腦が壓つけられるやうであつた。その側では何彼に心のくつろげる、第三者の母親のゐないことが、賴りなかつた。女中や何かに、じろ〳〵見られるのにも、氣が落着かなかつた。波の音にも亢進した神經が怯えつかれて、夜の明けるのが待遠しかつた。

「年さへ違はなかつたら己たちはもつと自由にしてゐられるのだ。それにお前には、旅の面白味といふものが解らない。」

岩辻は失望したやうにさう言つて、旅へ連出したことを後悔した。

「今にきつと來たくなることがあるよ。」

彼はさうも言つて、直にそこを引揚げたのであつた。

二人は廣小路へ出て來た。

岩辻は自分の書生時代から有る家だといつて、思ひついて、一軒の鷄屋の奥まつた二階の部屋で、飲食をすますと、微醉機嫌で、町をぶらついたり、勸工場を覗いて見たりした。鳥打帽を眉深に冠つて、二重廻しを着た彼の姿が、どうかすると照子の目に、彼を十歳の餘も若く見せた。照子は振顧られる通りすがりの人の目の前で、男の矜に媚び甘えるやうに、優しい口を利いたり、嫣然した笑顔を見せたりしてゐたが、やつぱり氣がはづまなかつた。と鏡の底から、自分を凝視めてゐる淋しい冷い目と出



會つたりした。

少しばかりの買ものをして、その建物のなかゝら出たのは、大分遲かつた。

店を仕舞ひかけてゐる仲町の方から、箱屋と令箱で出てゆく、藝者の姿などが目についた。あの社會にゐたら、自分も今頃は矢張あの女のやうな日を送つてゐるに違ひないと照子は考へた。

「この子も、顏にもう少し愛嬌があつたらね。」

照子は誰かに顏を眺めながら言はれた、そんな言を憶出した。

## 十

照子が十九になつた年の冬に、住なれたその家を引拂つて、岩辻の本宅近くへ移されたのは、彼女が初めての産褥につく半歳も前であつた。

猛獸の啼聲などの聞える、動物園に近いことが、大事の産婦に惡いと云ふのであつ

たが、谷中の墓地への通路に當つてゐることなども、緣起を氣にする岩辻には不安であつた。

少しでも體に異狀が起ると、それが岩辻に騷がれる妊娠のやうに思はれて、照子は可憐しいやうな歡喜を感ずるのであつたが、愈眞實となつて現れるまでは、それを信ずる氣にはなれなかつた。

「今歲はこゝで二度目の花見だ。」岩辻がさう言つて、その頃照子とも往來するやうになつた夫人の松子や師匠などを引張つて來て、好きな琴などを彈きながら一日遊んでゐた、上野の花の盛が夢のやうに過ぎて、不忍の池に浮出した蓮の葉が、日に〳〵濃く重なりあつて行く頃から、照子は不思議な倦怠を體に感じてゐた。

頭腦を壓つけるやうな夏の瘟氣が、青い木の影の隙から、部屋のなかまで這ひ寄つて、雨の降る日などには、柘榴の赤い花の色が、處女の心臟のやうな鮮かさを見せてゐた。雨があがると、干物のよく乾くやうな日が赫と照出した。



一面に蓮の蔓つた池の綠を、車の上から眺めて、ある日照子はしばらく出なかつた外の空氣を懷しみながら、澤の方へ體を診てもらひに行つた。

「それが眞實とすると、三月頃からと見なければならん。」

岩辻が今朝もさう言つて、眼の色などの水々した照子の顏を眺めながら、出產の月を繰つてゐたが、不思議に嚴肅な表情をしてゐるのが、照子の目についた。「その順でゆくと、此十二月には己は子供の顏が見られる譯だ。」

岩辻は心持黑味を帶びて來た乳の色などを、不思議さうに眺めながら言つた。

「でも、何だかまだ解りやしませんね。」

照子は床のうへに起きあがつて、不味さうに莨をふかしてゐた。

「左に右それで松子の言條は立たなくなつたといふものさ。」

「やつぱり有つたんだわ。」照子の目から、冷たいやうな光が、男の顏を射た。

「だから所詮はお前の手柄だ。」

「夫人だつてきつと悦んで下さるわ。」
「それは悦ぶとも。」
岩辻は元氣よく床を離れて、諧などを口吟みながら廊下へ出て行つた。
照子がちよい〳〵顔をだしてゐた澤の玄關を訪れたのは、その日の午後であつた。
澤は病院を出て、去年の夏から本郷の方に開業してゐた。照子が岩辻へも、彼を紹介せてから、其自用車が偶には櫻木町の方へも嚮いて來た。
照子の見てゐる前で、二人のあひだに黑白が爭はれたりした。照子の稚い時分のことなどを言出して、澤は照子や母親を笑はせた。遊びなどをして異つた世界を知つてゐる彼は、岩辻のゐない時など、長火鉢の傍で母子を悦ばせるやうな話に富んでゐた。
「かう來れば占めたもんだ。」
澤は照子の體を診てから、にや〳〵笑つてゐたが、照子はベッドを降りると默つて帶を締めはじめた。



## 十一

照子は中庭について、鍵なりに曲つた廊下を通つて、奥の方へ顔を出したが、そこで澤の夫人と三時間も話してから、漸と家へ歸つた。
東京産の氣爽な夫人は、茶の室で小い子供たちに御飯を食べさせてゐたが、心靈上の仕事に係はつてゐる四谷の親類に、今の身の上や考へ方を餘り好く思はれてゐない照子には、そこが一番氣のおけない寄つき場であつた。四十近い年になつてゐる夫人は、二つも年の若い澤には、移りのわるいほど姉さんじみてゐたが、世帶にかまけて姿が崩れてゐるので、顔が一層更けてみえた。
「もう有つたんですて。」
夫人は往診に出る澤の着替の世話をしてから、照子の側へやつて來たが、つや〳〵した髪を、ぴつたり左で別けて、口髭のぴんとした、色白の優しい顔をして、小肥り

に肥つた體に切立のモオニングを着けて出て行く澤の後姿が、廊下の方に見られた。
「岩辻が、切めて澤さんぐらゐの年だつたら好いだらうに。」
照子は自分の思つてゐたことを、母親に言はれたやうな氣がしてゐたが、稚い時分を知られてゐる澤に對する心持は、親しい兄のやうな感じでしかなかつた。
「まあ可ござんしたね、何にもかも照子さんの思ひどほりに行つたんですね。」夫人は淡蒼い白粉の痕のまざ〳〵見透される外眦に小皺を寄せて、照子の體を覗き込むやうにして言つた。
「寅歳の人は、好いとなるとぐつと好くなるつて言ひますが、眞實にさうかも知れませんよ。」
照子は口元に淋しい笑を洩したが、夫人の言ふやうな運が、自分の前途に輝いてゐるやうに思へて、不思議に自信が出て來るのを感じた。
「でも詰りませんわ。私一生こんなことして暮さうとは思ひませんよ。」



照子はさう言つて、輭やかな指頭で、細い煙管に莨をつめてゐた。
「如何してそんな事を言ふでせうね。貴女なんぞ、人が羨む結構な身分ぢやないの。このところで餘計なことを考へちや駄目ですよ。眞實に辛抱する氣におなんなさい。」
夫人は窘めるやうに言つた。
照子は二三服蓮葉な莨の喫方をしてゐたが、「どうせ私も恁うなつてしまつた體ですから、御母さんのゐるうちは、あの人の世話にならうとは思つてゐますの。」
「それが可ござんすよ。岩辻さんは照子さんに首つたけだと云ふから、何に限らず貴女の言ふ目が出ますよ。子供ができれば尙更のことです。」
歸りがけに電話室へ入つて、照子は岩辻を呼出した。
「やつぱり然うなんですて。」
岩辻が電話口へ出て來たとき、照子はさう言つて、診察の結果を報した。岩辻の笑ひ聲が手に取るやうに聞えてきた。

「それでは其心算で、準備をしなくちやならないね。養生法なども、澤君に篤と訊いておきなさい。」

岩辻は氣忙しさうに話かけた。

「では其事が判つたら、早くお歸りなさいよ。いつ頃から來てゐるんだね。」

「お晝頃來ましたの。散々遊んで今お暇にしようと思つてるところなんですの。」

照子は應へた。

「お晝から來て、今までそこに何をしてゐたのだ。」

「でも今のうち精々と出ておかないと、今に出られなくなつて了ふんですつて。」

照子は笑ひながら電話を切ると、旋てそこを出た。

白い砂埃のあがる三時頃の通を、照子は幌をかけて輕く俥を飛せてゐたが、空想がそれからそれへと湧いてゐた。



## 十二

本宅から四五町離れたところで、その頃から取かゝつた普請が、夏の末には出來あがつて、照子はまたそこへ移ることになつた。

壁がまだ乾き切らぬうちに、照子は古家を買潰して建直したその家を二度も見に行つたが、岩辻が時々圖などを持つて來て、說明して聞かしたに違はず、座敷の床構の立派なことなどが、そんな家を見つけない照子の目には物珍らしく眺められた。墨流しのやうな木目を持つた高い杉の天井や、黑柿の床柱、柾の細く通つた檜の梁や柱なども、その都度岩辻が見積書などを見せて、鼻にかけてゐたゞけに、直打がありさうに思へた。照子が小机でもおいて坐つてみたいやうな、手間の器用な小さい部屋や、その頃漸く筋道のわかつた花でも引くやうな、用心の好い小座敷などもあつた。

七月の月へ入つてから、最初の戌の日を卜して締めてもらつた腹帶が、もう幾度と

なく産婆の手によつて結ひ直されてゐた。
「位置も寔に申分がございません。ほらこれがお手でございますよ。」
照子は戌の日ごとには見舞つて來る産婆の手に、さう言つて好き自由にさはられて蠢いてゐる胎兒の苦しみに、何の感じも起らなかつたが、初めて經驗させられた女の苦みに、淺猿しい罪人のやうな心が怯えた。
氣分が憂鬱に陷つてくると、一日人に會つたり口を利いたりするのが厭さに、自分の部屋に閉ぢ籠つて泣いてゐることがあつたが、上野の森から聞えて來る動物の啼聲にうなされて、一晩中暑苦しい蚊帳のなかで、悶へてゐることも度々あつた。涼しい夜明けの風が、寢床へ流れてくる頃に、彼女はやつと疲れて眠ることが出來た。
本宅へ遊びに行つて、ちよい〳〵逢つてゐるうちに、氣心を知合つた松子が、樣子を見に時々やつて來た。長いあひだ子供のないのを苦にしてゐたので、そんな女をおくことには異存がなかつたが、照子が自分の子を手放す氣になるか否かゞ、危まれた。



「私は自分ではもう疾に諦めてしまつたから、その子は是非自分の手で育てゝみたいと思つてゐるの。」
自分に子供が産れでもするやうに、松子は赤子に着せるために、思ひついた片などを持つて來て、それを照子と一緒に積つたり裁つたりするのを、樂みにしてゐた。着古しの單衣ものなどから、襁褓が澤山始末の好い彼女の手で作られたりした。經驗のある母親や照子も知らないやうな、お産の知識を彼女は不思議に有つてゐた。
新宅へ引移つたのは、岩辻が仕事の用事で關西の方へ旅をしてゐる留守中であつたが、櫻木町へ引越した頃からみると、荷物が面白いやうに殖えて來てゐた。
「これがみんな私の財産なのだ。一品だつて減しちやならない。」
照子は重苦しい體をして、運込れる箪笥の抽斗の内容を一々觸つて見てゐたが、まだ手を通したこともないやうな新調の衣裳にも、不思議な愛執が感ぜられた。
「この家だつて、かうして作つておけば、今に一萬圓位には賣れるよ。」

引越の饗應酒の支度などに差圖をしてゐた松子は、今更のやうに部屋の結構を見廻してゐたが、照子もそんなものゝ價値を見積るのに、深い興味をおぼえずにはゐられなかつた。そしてそれだけの物を、不斷に自分が有つてゐることを考へるだけでも、自分の美貌に強い自信が湧いて來た。

「ちよつと御覽なすつて下さい。」

家見舞にやつて來た、澤の夫人を座敷へ案内するとき、照子はさう言つて長火鉢の傍を離れた。二人は人氣の無い、廣い座敷へ入つていつた。青い疊の匂や新しい木の香が、氣持よく彼女の鼻に沁みた。

## 十三

お產の前後も、岩辻の銀行にゐる留守の間などに、ちよい〳〵顏出することを怠らなかつた松子の心が、如何かすると照子に對する此頃の岩辻の態度に調子づいてゐる



やうな、母子の心と觸合ふのが感ぜられた。

「こんなにして私が一生懸命になつても、肝腎の御母さんが其氣になつてくれなくつちや駄目ですからね。」

照子が身重になつてから、女中の手を殖した家にゐて、何一つ骨のをれる仕事に働くこともない母親や照子の前に、自分の心持の理解されない飽足りなさが、ふと彼女の口から出たりした。

岐阜の方にある零落した實家の親達も亡なつて、ちよつとした緣邊で貰はれて來てから、五六年も世話になつてゐた神田の養家とも、身分の懸隔などから、いつとはなく深い溝のできてしまつてゐる松子は、照子母子に比べては、自分の方がどのくらゐ苦勞人だか知れないと思はれて來た。

「私が行つて見なかつた日には、あの家は迎も持切れやしない。」

松子は蔭でさうも言つて、顏を顰めてゐた。そして檜造の緣側や柱などの拭掃除

などに、自分の方から一人働けさうな女を、照子の方へ遣つたりした。
母親は朝おきると、山村の先祖や照子の父や兄の位牌を靡べた佛壇の前に坐つて、長い時間のあひだ朝のお勤めをするのが、毎日の日課であつたが、可也な家柄であつた自分の家の方に執着してゐる心が、時々折合ふことのできぬ松子や、その周圍の氣分に不安な感じを起させた。
「私たちも、山村の家といふことも考へにやならんからね。」
母親は、自分の方へ引取られる子供が、どんなに幸福だか知れないやうに考へてゐる松子の言草が、氣にかゝつてくると、照子にさう言つて當つた。
「でも、岩辻の相續者になれば、子供も仕合せぢやないの。」
照子は腹を痛めた自分の子供を、何の苦痛もなしに松子に引渡してしまへさうに思へた。照子はまだ岩辻の口から、彼の財産の確とした額を聞されたこともなかつたが、岩辻の口から洩れる月々の收入や家屋敷丈でも、可也に見積れた。澤の夫人など



に言はせると、その金の蓄積には、相應に暗い影も附絡つてゐるらしいのであるが、それは眞の最初十年弱のことで、重に相場で當てたと見るのが、至當らしかつた。左に右幾十萬——ひよつとしたら百萬近い財産が、彼の懷ろに眠つてゐるらしく考へられた。
「その財産が、自分の子供のものになる。」
照子はそれを想像するだけでも、渾身の肉が引締つてくるやうな歡喜に戰かずにはゐられなかつたが、測りかねるやうな男の心が、やつぱり不安であつた。
陽氣が涼しくなつてからは、被布に體を隱して、しばらく見られなくなる外へ出歩くのを、樂みにしてゐた照子は、臨月が近づくにつれて、それも段々厭はしく思へて來た。顏の相や、腹の工合などで、產れる子供の女だといふことが、人々の間に確められた。
「愈〻女ときまつたら、產衣や何かもその意で用意しなければならない。」

岩辻は或日産婆から、略それを明言されたとき、淡い失望を感じながら、さう言つてにや〳〵してゐた。

照子も同じやうな物足りなさを感じながら、懶げな體で屏風の蔭から出て來た。頬や目の肉などの窶れおちた横顔などが、どうかすると凄いほどの美しさを、その目鼻立に見せてゐた。

## 十四

來れば大抵午前のうちと決つてゐた産婆は、その日も十一時頃にやつて來たのであつたが、診察の了つた頃には、岩辻の注意で、早や書餐の用意がしてあつた。

可也上流の家庭へ入つてゐるらしいその産婆は、堅肥りに肥つた小さい身體に、較廢れ氣味な風通の襲着をして、鼠色の紋附の羽織などを着けてゐたが、御飯の御馳走になると、しばらく世間話をして、直に俥で歸つていつた。



「さやうでございますね……。」産婆は岩辻から發した、育兒法の質問に應へて言出した。

「何と申しても、御母さまのお乳に越したことはないのでございます。ミルクでもお育ちになりますが、些と御病氣でもなさいますと、直にお痩になるところを見ますと、餘りお勸めはできませんのでございます。それに手がかゝつて爲樣がございません。止むを得ませんければ、乳母でございますけれど、此が又なか〳〵好いのが見つかりませんので……。」

「それで、子供の天性にもよるでせうが、大抵親の顔を覺えるのには幾月目ぐらゐで……。」

「もう直でございますよ。百日も經ちませば……今時のお子さん方は智慧のつき方が誠にお速くていらつしやいます。」

桐胴の手炙の一つを隔てゝ、岩辻と駢んで坐つてゐた照子は、そんな話が出ると、

何だか厭なやうな氣がして、席をはづして了ふのであつたが、その話には、やつぱり耳が傾げられた、子供の運命も氣にかゝつた。

「では百日も乳を呑ましたら、後は乳母につけるとしよう。」

産婆が歸つてから、岩辻は照子に言つた。

「ぢや子供の籍は如何なるの。」

照子は上姙みの身體を少し崩しかけて、俛いてゐた。

「籍は松子の子にしておかないと、都合がわるい。」

「へえ、さう。」照子は甘えるやうに言つた。「それぢや滿らないわ。」

「滿る滿らないの話ぢやないぢやないか。此場合お前がそんな事を言ふ必要は少しもないので、子供が大事だつたら、籍は松子の方へ入れておくに限る。さうでないと、庶子といふ肩書がつくから、一生世間に頭があがらない。」

「それは然うですけれど……一生他人でゐなければならないんでせう。」



「そんな譯もないぢやないか。子供の利益を思つたら、やつぱり松子につけておく方が都合がいゝ。然しておいたところで、誰もお前を他人だと思ふものはありやしない。時節が來れば、子供にだつて自然に解つて來る。つまり籍は世間體だけのもので、血をわけた母子は何處までも母子に相違ないのだから、その意で安心してゐるがいゝ。」

照子は頷いて見せた。

「その代り一萬あるか、十萬あるか知らんが、左に右岩辻の財産は、相當の方法で松子なりお前なりに、幾分をわけて、餘は當然子供の所有に歸する譯だ。若し幸ひに今度男の子が産れる場合があるとしてごらん、私の心持も自然異つて來るから、お前の肩身は益廣くなるばかりぢやないか。」

「それや然だけれど、自由にならない財産なんぞ、いくら有つたつて駄目ぢやないの。だから先へ行つて滿らないと思ふわ。」

照子は淋しく笑つた。

岩辻は「ふふ」と笑ひながら、女の顔を眺めてゐたが、
「誰のお仕込だか知らないけれど、山村のお嬢さんも、此頃は如何してなか〳〵門つこにおけなくなつた。」
「如何して？」
照子は不思議さうに目を睜つた。

## 十五

月が十二月へ入つてから、豫想どほり女の子を分娩するまでに、そんなやうな問題が、憂鬱に陷りがちな照子の頭腦に、時々くよ〳〵と考へられたが、氣分の好い時には不斷の安易な心に復つて、お産後の正月を迎へる支度などに、心が紛れてゐた。
店屋と店屋との間の、廣い路次の奥にある靜な家のなかにゐると、少しづゝ暮の景氣を添へて來たらしい外の様子も餘所事のやうで、きちんと取片着いた部屋々々が、



單調にみえた。
ある日の午前、日當りのいゝ座敷の縁近くへ出て、その頃少しづゝ覺えこんで來た花弄りをしてゐると、照子は急ににが〳〵する痛みを腹部に感じて來た。日本橋の方から來てゐる女の先生の活けてくれた花を床の間に直したり、彼女を玄關へ送出したりしてからも、痛みが時をきつて襲つて來た。
「まだ〳〵そんな事ではお出になりませんよ。」
女中を走らせて、呼びにやつた産婆がやつて來て、さう言つて歸つていつたのは、晝過であつたが、全くかぶつて來たのは明がついてからであつた。
電話が銀行へかゝつて、岩辻がちよつと顔を出した頃には、照子は座敷の眞中に安臥されて、其側にかひ〳〵しく診察着をつけた産婆が、若い助手と二人で、支度に取かゝつてゐたが、八時少しすぎに、本宅で御飯を食べて、二度目にやつて來たときには、照子の苦悶の聲が、靜かな屏風のなかゝら洩れ聞えた。

岩辻は、茶の間へ來て坐つたり、様子を見に座敷へ入つて來たりして、心が落着かなかつたが、屏風の蔭から見ると、八反の蒲團を着て臥てゐる照子の、眞白い腕を助手の赤い肥つた手に絡みつけて、時々美しい顔を顰めて、切なげに唸つてゐるのが、可憐いやうに目に映つた。銀杏返しに結つてゐる髪が崩れて、顔が桃色に上氣してゐた。乾いた紅い脣を嚙んで、曇んだ目で岩辻を見てゐた。

「そんなにお長くは、苦しませません。」

産婆は自信ありげにいつて、汐時の來るのを待つてゐた。

苦しみにひしやげたやうな陰性らしい泣聲を立てゝ、小さな肉塊が、産婆の手に取あげられたのは、それから間もなくであつた。

悉皆體の始末をされてから、産婦は輕い腦貧血にすやされつゝ、重い目蓋をつぶつて、時々快い眠りにおちてゐた。

「照、照。」



母親は不安さうに、枕頭にすわつて彼女を呼起した。

「眠ると不可ないなんてことを申しますけれど、少しも心配はございません。」

産婆はさう言つて、汚い體を洗つてから、赤子の體量を測つたりした。

「ほう、大きな子だ。」岩辻は傍から嬉しさうな聲を出した。

「ほんとに御發育がよくていらつしやいます。」

産婆は赤子に着物を着せると、そつとそれを産婦の傍にしかれた小い寢床のなかに横へた。赤子の見えない目が、時々うつすり薄明のなかに開いてゐた。

「お産なんか、二度とするものぢやないと私は思ひました。」

照子は少ばかり飲まされた葡萄酒などに力を得た顔を耀かせながら言つた。

肅かな陽氣な空氣が、夜中の食物などをつまみながら話してゐる産婆や主のあひだに漂つてゐた。

「初めてのお産は皆さん然う仰やいます。」

産婆は手巾で口をおさへながら、笑つた。
「さう言つても、これが女の役目だから爲方がない。」
岩辻は二三杯飲んだ酒に、細い目の縁を紅く染めながら笑つてゐた。
産婆が歸つてからも、岩辻は産婦の傍を離れなかつた。
照子は時々慵げな口を利きながら、嬉しさうに赤子の顏を眺めてゐたが、旋てすやすやと眠つてしまつた。

## 十六

お七夜が直に來た。
産婦の肥立も、極めて良好であつた。そして肉がしまつて來て、一時減つてゐた體量のまた殖えはじめて來た赤子に、毎日來てはお湯をつかはせて歸る産婆の手に弄られる子供を見ると、淡い愛執の加はるのが感ぜられたが、切なげに泣立てる口へ乳房



を含ませなどする自分の母親振に、不思議な反感を覺えた。
岩辻は毎日のやうに、子供を見に來た。そしてお七夜の日には、産婆のほかに、ほんの内輪だけの人を集めて、祝ひの酒などを注交した。その中には澤の夫人もゐた。
床の間には、芽出たい幅などがかけられて、その前に、お産を聞傳へた知人から受けた祝ひものが、こて〳〵と幾積にも積まれてあつた。銀行の仲間から贈つてくれたものや、關係してゐる會社の連中から來たものなどが多かつたが、中には岩辻が贔負にしてゐる料理屋や、出入の商人から祝はれた品も鮮くなかつた。
寢てゐる照子の目に、そんな贈り物の殖えて行くのが誇らしく眺められた。自分の子供がどんな好運をもつて産れて來たかと思はれて、涙ぐましいやうな嬉しさを感じた。
「この子がお嫁に行くときまで着物に不自由する心配はいらんぞね。」母親もさう言つて、驚きの目を睜つてゐた。

産れぬ前から、岩辻の頭腦に考へられてゐた子供の名前が、二三日前に漸と取決られて、出産の屆が無事にすまされた。子供は千鶴子と名づけられた。

「松に千鶴は母子なかゞ睦まじくて可いぢやないか。岩辻にも萬更縁がないこともない。」

岩辻はさう言つて、獨りで嬉しがつてゐた。

忙しい暮と正月をはさんで、百日ほどの日がたつてから、岩辻は年取つてからの初子に對する限ない悅喜と愛情とを、出來るだけ派手にしてみせやうと云ふ氣持から、抱への車夫や出入の職人たちに、新しく染めさせた法被などを着せて、晴々しく配りものを配つて歩かせたが、赤子は折鶴の模様などのある、目のさめるやうな祝着に着飾られ、照子の膝に抱かれて、産土神へお詣りにやらせられた。

春の氣分のすつかりなまけた七草すぎに、漸と産褥を離れることのできた照子は、暫くぶりで外の空氣に觸れるのが嬉しかつた。照子は正月にも着るをりのなかつた



黑の三枚襲を、産褥あがりの衰へのみえる、なよ〳〵した體に着飾つて、産土神へのおまゐりをすますと、その足で懇意な五六軒の家へ、禮まはりをして歩いたが、祝つてくれた人達を呼ぶために擇ばれたお茶屋の方へ出向いていつたのは、もう三時過ぎであつた。

川ぞひの町にあるそのお茶屋の玄關口へ、照子たちの俥が、威勢よく引込まれて行つた。照子母子の俥の後には大きないくつもの犬張子が結ひつけられてあつた。照子は子供を女中に抱せると、草履ばきの疲れた體を俥からおりて、氣高いやうな自分の姿に目を睜つてゐる女達に案内されて、水にのぞんだ下の部屋へと入つて行つたが、廊下には今日の世話やきを承はつてゐる男達の、氣忙しさうな顏が見られた。岩辻も羽織袴で來てゐた。松子も見逆へるやうな紋附姿で、照子を迎へた。

着飾つた子供の側へ人々の顏がやがて集つて來た。

「何てお身大きくていらつしやるんでせう。」

さう言つて愛してゐる、子供の好きさうな年増の女中の手へ、子供が引取られて行つた。

照子は誰にも取あはず、部屋の眞中にすわつてゐたが、岩辻がそは〳〵と部屋を出たり入つたりしてゐるうちに、今日の賓客がぽつ〳〵やつて來た。

全く日の暮れるには、まだ間があつた。照子は所在なさゝうに、障子をあけて、日暮方の外の景色などを眺めてゐたが、水のうへには日の影が次第に薄れて、向河岸から燈影が瞬きはじめた。

## 十七

手炙や碁盤を圍んで、そつち此方に二三人づゝ凝つてゐた人たちが、それ〴〵自分の席に就いたのは、明が煌々と廣間に照わたつてからであつた。春着の紋附などを着た、重に年取つた幾組かの藝者が、お膳を運びきつた時分に、照子達の姿も立廻した



屏風の蔭から現れたが、一同に會釋をすると、下の方に座を占めた。照子は自分に集つてくる多勢の視線が、目眩いやうな氣がされて、兩手を膝のうへに載せたまゝ、俛いてゐた。

やがて銚子が女たちの手に、取あげられた。三十人ばかり居流れた人達のなかには、照子が見知りの顏もあつたが、大抵は名さへしらない初對面の人ばかりであつた。それらは孰れも古くから岩辻が交際つてゐる同郷の人や、現在の仕事に交渉のある連中であつたが、家庭の內面を知られても不都合のないやうな近親者らしく見受られた。

「え、今日は皆さんようこそお集り下さいまして……。」

酒が少し廻つたところで、岩辻は腰の低い調子で、末座の方から挨拶を述べはじめた。

「私も皆さんのお蔭で、金の點では微力ながらも今日漸く基礎が出來てまゐつたやう

な譯で、これからが眞實の活動のできる男ざかりと云ふ時期へ達してをるのでございます、不足がないと云つては、聊か口はゞつたい申分ではありますが、先分相應のことは出來てをる意でございますが、唯一つ……。」

一つ二つ拍手の音などが聞えてゐた。岩辻の挨拶はまだ續いた。

「……で、まあ今度幸ひに一人の女兒を擧げまして、今日がちやうど宮詣と云ふ日取になつてをりますについて、皆さんにも悅んでいたゞきたいといふ考へで、一口差あげることに致したやうな次第で……。」

岩辻の挨拶がすんだところで、人々の手に猪口や箸が、また取あげられ、女たちの陽氣な笑聲や話聲が、言合したやうにそつちにも此方にも起つて來た。

調子を合す三味線の音が、次の部屋から聞えだして、藝者たちのつけるお座附や、美しく着飾つた半玉の踊などが、一同の目を惹つけて、席が段々崩れかゝつた頃には、咽喉自慢の連中の隱藝などが演ぜられて、醉つた人達の顏には興奮の色が見え、



女たちの姿が目まぐるしく、その間を動いてゐた。

「一つ差あげませう。」

年取つた剽輕な男が、照子の前へべつたり坐つて、猪口を差したりした。

照子は陽氣なこの場の光景に、ぽつと醉つたやうな顏をして、思ひだしたやうに時時箸を動かしてゐた。浮いた藝者たちの爲ることや言ふことに、注意が惹れた。

「如何だい、さう澄してばかりゐないで、今日は少し醉つてもよからう。」

澤もいつもよりは狎々しい口を利いて、照子の傍へ寄つて來た。

ひとしきり人々の騷ぎがしづまつて座がしらけかゝつた時分に、照子は岩辻の注意で宴席から姿を隱すと、下の部屋で飯をすまし、女中に子供をだかせて、松子たちと一緒に一足先にそこを出た。

外は大分更けてゐた。

岩辻が歸つて來たのは、茶の室の長火鉢の側で、折などをひろげて、母親が一口飲

みはじめてゐるところであつた。
着替をしたばかりの照子の顔には、少しばかり強ひられた酒の醉がまださめずにゐた。
「あすこの藝者つて、皆なあんなものなの。」
「先づあすこいらが一流どこの顔だらう。面はまづいが藝はある。」
照子は思ひあがつたやうな顔をして、女の品評をしてゐたが、お産をしてからの照子の此頃が、一層岩辻の目に美しくみえてゐた。

## 十八

岩辻が墓參のために、幾年振かで國へ歸つていつた時には、照子も自分の希望でつれて行つてもらふことにしたが、その頃には子供も人の顔を見て笑ふほどの愛嬌がついてゐた。色は父親に肖て黑く、頭腦や體の骨格も、父方の系統をひいてゐるらしかつ



たが、黑瞳の大きいみづ〳〵した目や、口元などが照子に酷肖であつた。
岩辻は一日でも、その子を抱かないと物足りない氣がして、よく自分で外へ抱出したり、膝の上へのせて、晩酌の膳に向つたりしてゐたが、照子と一緒に好きな芝居などを見にゆくときにも、子供は女中に負さつて連れて行かれた。
七子で染めた男女お對の下着や、長襦袢などが、そんなをりに照子の箪笥のなかゝら取出された。
餘寒のをりに、時々風邪などをひいて、不意に夜更に引つけたりして、意ひのほか幼兒の育てにくいのに焦れてゐた照子は、今年も花の咲く頃になると、思ひのまゝに外出のできないのが物足りなかつたが、榮華な生活の興味が、お產の前後からめつきり放縱になつた彼女の心に、強い勢ひをもつて漲つて來た。
「私此頃はもう何にも思はない。」
照子は放逸なベッドの上に、慵げな白い腕をのばしながら、周圍に渦をまいてみえ

る、自分の生活の總ての幸福に、考へ浸つてゐるやうな目色をして呟いたが、衝動と興奮につかれた體が、やつぱり呪はしく思へた。

「ほんとに不思議なものね。」

照子はそんな反感を、わざと押潰すやうにして、男に甘えかゝるやうな樣子をして見せた。

「何がそんなに不思議なのだい。」

岩辻は生えかゝつた髭のなかゝら、白いものゝちか〳〵してゐる顎を突つけるやうにして、彼女の顏のうへに、不思議さうな目をおとしてゐた。それまで遊蕩の機會と經驗との幾どなかつた彼の硬い心が、次第に放逸な若い女の體に惹きつけられて行つた。

「でも私が貴方といふ人と一緒になるなんて、不思議ぢやないの。」

照子は淋しく笑つた。



「つまらん事は考へないもんだ」

「あなたが松子さんと婚禮する時分には、私は世のなかへ出てゐたかゐないか知れやしないわ。」

「それは爲方がない。己が引あげてこなければ、お前は今頃誰の有になつてゐるか解りやしない。」

銀行へ行つてゐても、岩辻は照子のさうした樣子や甘い私語が、目や耳についてゐるのを感じた。輕い疲れが、獨り椅子にもたれて帳簿しらべをしてゐる時などの、慵い體や神經に快よく絡はつてゐるやうに思へた。

「お前たちは芝居へいつて、一體どういふところを見るのだい。」

岩辻はさう言つて、照子たちの芝居評を笑つてゐたが、照子はこの頃漸く頭腦に入つて來た、役者たちの顏や樣子に、心を惹れた。樓敷から見おろす陽氣な歡樂場の空氣に浸つてゐるのも氣持がよかつたが、そこに着飾つて坐つてゐる自分の美しい姿

に集る、周圍の人達の視線にも、浮々した心が唆られた。

## 十九

照子たちが新橋を立つたのは、六月はじめの或朝であつた。

荷物や何かをいれて、五臺ばかりの腕車をつらねて、停車場へ着いた時には、照子は五六年前に東京へ出て來て、そこへ着いた時から見ると、我ながら不思議なほど變つてゐる今の身のうへを考へない譯には行かなかつた。そして立つ前に起つてゐた松子と自分との間の感情の紛紜などは、全く忘れてゐた。

愈立つといふ日の二三日前にも、照子は久振で逢つてみたい、または母親がさう希望してゐる以前の知人などに持つていつてやるための土産ものや何かを買ひに、日本橋の方へ出ていつた。

外はめつきり夏らしくなつて、鐵道馬車の通つてゐる大通は、白い砂のたつ地面の



瘟氣が、熱く顏に當つた。

照子は半襟や頭髮のものなどで、自分にも調へたいものがあつたので、そつち此方歩いてゐるうちに、可なり時間を取られてしまつた。岩辻の出てゐる銀行の前なども通つた。

「松子さんが、今そこへ歸つて行つたばかりだが、逢やしなかつたかい。」

嵩張つた買物を膝にのせて、照子が俥でいそ〳〵歸つてくると、母親がさう言つて訊ねた。

子供が產れてから、一時頻繁になつてゐた松子と照子との往來が、何時とはなしに途絶えがちになつてゐた。

「私が自分のお腹を痛めたものと思つて育てますから、安心してゐて下さい。」

松子は時々千鶴子を自分の方へ引取つていつて、自分の膝や牛乳に昵ませることに骨を折つてゐたが、やつぱり自分のものに成切らないやうな賴ない氣がしてゐた。

病氣の時も、松子は附きりで濕布や吸入の世話をしてゐたが、自分に乳のないことが、彼女の後天的愛情を裏切るやうに思へた。それに放縱な照子の氣分がちよい〳〵顏を出してゐる彼女にも分明感ぜられて來た。

「私がお前の旅へ立つ話をしたら、あの人は大變氣に入らんやうな事を言つてゐたよ。」

母親はさうも言つて照子に告げたが、照子は二包ばかりの買物をそこへ擴げて耳にもかけずにゐた。

「子持が旅行をするなんて、第一お金もかゝるし、お墓詣だといふのに外聞も惡いしするから、今度は廢めた方が可いだらうつて、そんな事を言つてゐましたよ。」

「へえ、そんな事を言つてゐて。」

照子は笑つてゐたが、誰が決めるともなしに、同行することになつた今度の旅行が、急に厭になつたやうな氣がした。最初は自分がそれを言出したのは事實だけれど、



岩辻の態度が煮切らないために、一旦中止してゐたのを、照子を殘して、一人で立つて行くのを物足りながつてゐるやうな岩辻の氣持が、やつぱり同行と決めさせたのであつた。

照子は春から、まだ遊び足りないやうな氣が始終してゐた。これまで知らなかつたやうな、都會生活の興味が、世間に目のあいて來た、何不足のない彼女の心に、活々と映つて來た。何を見ても、どこへ行つても彼女は氣が浮立つた。岩辻がゐなくなればゐなくなるで、また氣が寬ぐやうな安易を感じた。其留守に、自分一人で行きたいやうなところや、母親に見せたいやうな物も澤山あつた。氣分だけでも、どんなに自由だか知れないと思はれた。

それに氣にならないほどの事だが、產後少し體を痛めたところなどがあつて、一度醫者に診てもらつた事があつたが、それにも拘らず體はよく肥立つて、發達しきらずにゐたものが、成熟しかけて來たやうな心强さを、何彼につけて感ずるのであつた

が、如何かすると微なその病氣が考へられた。
「お前が厭なら松子をつれて行かうか。」
そんな事を言立てゝ、同行を澁るやうな照子に、岩辻はさう言つて不機嫌な顏をした。

## 二十

それで照子はまた行くことに決めたのであつたが、その翌日千鶴子を抱いて本宅へ遊びにいつたとき、二階座敷で好きな琴を彈いてゐた岩辻と松子と照子とのあひだに、またその話が出て、それで悉皆打壞れて了はうとしたのであつた。
座敷にはその頃岩辻が買求めたお國風の燭臺などが點されて、お膳やお銚子が出てゐた。琴の師匠の娘だといつて、照子も二三度會つたことのある、二つばかり年上の貞子といふ丸ぽちやの女も、そこへ來て岩辻の望みで合奏などをやりながら、遊んで



ゐるのであつた。
若い時分から箏曲に堪能な岩辻は、素人ばなれのした器用な腕をもつてゐたが、以前から親しくしてゐた師匠は、寧ろ長唄の方が上手だと言はれてゐた。年取つたこの女の長唄と、岩辻の琴との合奏が、時々その二階から聞かれた。
照子は岩辻の好みで、櫻木町にゐる頃から少しづゝ敎はつてゐたのであつたが、二十段もあがると、もう譯もないものゝやうに思はれて、直に飽きてしまつた。やらうとさへ思へば、何時だつて行れさうな氣がしてゐた。
「貴女もまたお始めになつたら如何でございます。折角あれだけにお成んなすつたのに、惜いぢやございませんか。」
貞子は照子に話しかけてゐたが、照子は彼女が仕立て着てゐる岩辻からの貰ひもの帶などに目をつけてゐた。
「この頃はお箏どこぢやありませんわ、乳呑兒があるんですもの。」

照子は松子に言はれたことを想ひ出しながら、さう言つて答へた。お婿さんの世話をするなどゝ云つて、貞子を最屓にしてゐる松子は聞かぬふりをして餘所を向いてゐたが、少しばかり過した酒に醉つた岩辻は、そこに横になつて、女たちの顔を眺めながら莨をふかしてゐた。蠟燭の灯が陰氣くさい影を、食物などの散かつた部屋に漂はしてゐた。

「結構ぢやございませんか。赤さんを少し抱せて頂きませう。」

貞子はさう言つて、照子の膝から千鶴子を引取つて愛してゐた。幼兒は丸い拳を握つて誰の膝にもぴち〳〵動いてゐた。

「その癖始終外を出歩いてゐるのに、爲ようと思へばお箏のお稽古なんか何でもありやしませんわ。」

松子は照子を遣込めるやうに言つた。

「さうは行きませんよ、それは乳母でもつけてある立派な家の奥さまのことですわ。」



照子は蓮葉な調子で答へた。

座が急に白けたやうになつて來た。

「それはお前の方がわるい。」

貞子が汐を見て、歸つていつてから岩辻は坐り直して照子を窘めた。

「いくら何だつて、あんな口の利方をするつて法はないぢやないか。」

「眞實ですとも、私たちが何か鄙吝で、貴女に不自由をさしてゐるやうに聞えるぢやないか。岩辻の仕向に、貴女は何も不足をいふところはない筈ぢやありませんか。些とは私のことや家の利も考へてみてごらんなさい。」

松子も襟を搔合せながら、目に涙をにじませて言出した。

照子も默つて聞いてゐた。

「それぢや子供の籍を私の方へ入れて下さい。さうすれば私だつて、その氣になつて家にじつとして此子を育てゝゐます。」照子は口惜しさに言つた。

「それは貴女の言ひだくれといふもんですよ。」松子は鼻で笑つた。「それも此も、貴方がこの人に甘いからなんです。誰でもさう言つてゐます。」

「お前も餘計なことは言はない方が可いぜ。」

岩辻はにや〳〵してゐた。

そこにあつた銚子や盃洗が、終ひにいら〳〵して來た岩辻の手に投つけられたりした。

## 二十一

それからの拘束のあつた旅行が、全く自分の思ひどほりになつた照子は、汽車が動きだしてからも、まだ氣がそわ〳〵して、明るい海の色も、青々した田畑の景色も目に入らなかつたが、相模の海邊や山の姿を迎へた頃には、都會生活を離れて遠い旅へ出立つて來たことが、しみ〴〵感ぜられて來た。



汽車が名古屋の大きな停車場へ入つた時分には、そろ〳〵暮れかゝつてゐた平野が全く夜の色に封されてゐた。旅行なれた岩辻は、寢たり起きたりして、汽車の進行には氣も留めないやうであつたが、傍に坐つてゐる照子の顏には疲勞の色が現はれてゐた。

附近の小驛に駐まる毎に、初夏の宵らしい田舍の氣分が、自分の故郷を照子に思ひ出させてゐたが、關ヶ原あたりでは、喧しく周に聞える蛙の聲が、一層彼女の心を寂しくした。鎖の音が夜の空氣に、がちやりと響いて、汽車がまた動きはじめた。

「こゝいらは眞實の田舍ね。」

照子は起あがつて窓の外へ顏を出してゐる岩辻に私語いた。附近の人家からの灯影が、物寂しく眺められた。

「さうでもないよ。已たちの市だつて行つてみれば、からもう田舍で鈍くさしたものさ。」

米原で乘替をした汽車が右に折れてからは、客車のなかは、幾んど全あきになつてしまつた。照子たちは寂しさを紛らせるために玩具などをこて〳〵取出したクションのうへに千鶴子をすゑて、左右から愛してゐたが、北の海邊の或靜な町へついたのは、夜が可成更けてからであつた。そのあたりは陽氣が全く變つてゐた。多勢の宿引の聲などが、厭はしく絡はつて來た。

その晩は、手摺際から暗い海などのみえる旅籠屋の二階に泊つた。

最後に乘つた動搖のはげしい汽車で、全く疲れてしまつた照子は、湯からあがつて來ると、もうがつかりして、少しばかりの物も咽喉へ通らなかつた。そして枕についてからも、風の聲や庭の噴水の音が耳について寢苦しかつたが、岩辻は明朝はやくこから儆つて行く腕車を吩咐けたりしてしまふと、疲れた體を蒲團のうへに横へて、直に寢込んでしまつた。

故郷の市へ入るまでに、照子たちは今一度宿屋に一夜を明さなければならなかつた



が、その邊の多くの峠や、野道を搖られて行く一行の俥は、麓の茶屋などの門へ時々引込まれて行つた。縣官や身分の好い旅客を迎へるために、別に營はれた座敷が、到るところにあつた。庭には赤い躑躅が築山蔭に咲いてゐたり、橋がゝりの水に菖蒲が植ゑてあつたりした。照子は赤い毛氈などを敷いたその座敷へあがつて、旅に窶れた顏容を直したり、子供に乳房を含ませたりした。

上京のをり、母と一緒に船で渡つて行つた海の色が、思ひがけなく時々海道筋の松原蔭に見えたり、麓の山道から見おろされたりした。その時の旅の哀愁が思ひ出された。

一行の俥が、目ざす町へ入つて行つたのはその日の午後であつた。貧しい町端の光景が、その土地に無意味な反抗をもつてゐるやうな照子の目に、懷かしく映つて來たが、市の寂しさは、何處まで行つても續いた。田舍らしい川原に、水が瀨を作つて流れたり、身すぼらしい橋のうへから、川上の山が物寂しく眺められたりした。人の影

が、まだ薄ら寒いやうな町を、夢のやうに動いてゐた。

「まあ、こんなですかね。」

ある大通の旅館の、奥まつた部屋へ落着いたとき、照子は裏切られたやうな物足りなさを感じたが、それでも落着のいゝ部屋には、思ひのほかの装飾品などが目についた。

## 二十二

照子たちは岩辻の墓参をすますと、五六日その市に逗留して、直にそこを引揚げたが、岩辻は西北にあたる或町の菩提寺に照子の父親の墓をも訪ねて、荒廃した墓所の手當を寺僧に頼んだりした。照子はお盆などに母親と一緒に、昔しそこへ墓詣に來たことなどを幽に覺えてゐたが、茸の出る頃にそこから程遠からぬ山へ、足に草履を結へつけなどして、山遊びに來た自分の娘時代が懐かしく思ひ出された。松林の多い山



蔭には女達の遊ぶやうな美しい芝生や、木蔭が澤山あつた。澄切つた秋空の透いてみえる松林のなかで、競走や鬼子つこなどの單純な遊びに笑興じてゐる男女の姿が、そこにも此處にも見られた。茸を捜すために、山深く分けて入つて行つた時のことなども忘れられなかつたが、今來てみると、そこが如何してそんなに樂しかつたかゞ不思議のやうであつた。

田畑の青々してゐるなかを、照子たちは俥を待してある町の堺の方へ、引返して來た。その町には、廣い寺域に深い山奥を想はせるやうな松風の聞える、大きな寺が幾個となくあつた。誰も貰ひ手のないやうな空地が、頽廢した町中の所々に見られた。

歸りがけに、照子が幼い時分から耳にしてゐた料理屋の、見晴のいゝ二階で二人は川魚料理で晝飯を食べたが、そこの座敷から見える白い川原や、川上の寂しげな山の姿が、汽車で通つて來た田舍と異りがなかつた。柱や廊縁の蝕んだ其處の建物も、居心地が好くなかつた。

「どんなにお金があつても、私はこんな土地に住みたいとは思はない。」
照子は産故郷の此土地と、全く根の絶えてしまつたやうな自分の現在に、初めて打突つたやうな氣がした。
途中で買物などをして、その日は一日町を見て歩いたが自分の住んでゐた屋敷町などを通つてゐると、こゝに住んでゐる人達の生活の細い氣分が、少しづゝわかつて來るやうに思へた。
「へえ、それが岩辻さんのお子ですか。」
照子が子供をつれて訊ねていつた昔昵みの或家では、母親などを能く知つてゐる老婦が出て來て、照子や子供の派手な姿に目を睜つてゐた。子息を師範學校へ入れてあつた其婦人は、遠國へ出てゐる其子息から支給を受けて、昔に變らぬその家に居ついてゐた。照子の友達であつた娘も、軍人の妻になつて、土地にはゐなかつた。照子たちの遊んだ庭が、昔のまゝに綺麗に手入をされてあつた。柘榴や枇杷のやうな果樹が



じめ〳〵した築地ぎはに、若葉の青々した枝葉を繁らせてゐた。
親類の家族だと云ふ若夫婦に廣い靜な家の大部分を貸してゐるその老婦人は、昔ながらの切髪姿で、茶の室で照子に子供や孫達の寫眞などを出して見せたが、照子がどんな生活をしてゐるかは、想像もつかぬらしかつた。
「御母さんも今ぢやお氣樂だらうから、こつちへ來てお暮しになれば可いのにね。こんな好い土地は何處にもないといふぢやありませんか。」
照子が獨りで辯りつゞけたあとで、老婦人はさう言つて、世帶をしまつて東京へ出ていつた母親を憐んだ。
「そのうちお金の二三萬圓もできたら、御母さんも此方へ來るでせうよ。」
照子はさう言つて答へたが、おろしてゐた子供を女中に負はせて、直に陰氣なその家を出て來た。
「おばさんも是非一度東京へおいでなさい。私の家は廣いから、いくらでもお宿をし

ますよ。」

照子は古びた式臺をおりると、さう言つて別を告げたが、近所では誰も自分を山村の娘とは氣がつかぬらしかつた。

## 二十三

照子たちが五六里離れた山の溫泉場で、二三日遊ぶつもりで、そこを引揚げた頃には、その妹と稚友達であつた或大通の唐物屋の若主人などとも往來するやうになつてゐた。町の銀行などに關係してゐるその男は、岩辻とも話が合つたが、照子は頰や顎の骨などの出張つて來た彼の顏に、今でも記憶に殘つてゐる、少年時代の美しさの全く消えてしまつたのが、物足りなかつた。一緒に世帶事などをして遊んだその妹の亡くなつたのは、もう十年も前の事であつた。

「おつかさんは如何なさいました。」



照子が骨董品などを素見してあるいてゐる岩辻と一緒に、幾度も通つたその店頭へ立寄つたとき、前垂がけのその男は、さう言つて變つた照子の姿を眺めてゐたが、五つも年上の彼に、初戀か何ぞのやうな淡い羞恥を感じてゐた頃のことなどが、幽に想出された。

藏に收つてある骨董品を見るために岩辻がそこの二階へ遊びに行つたとき、照子も一緒について來て、器物などの自慢で侑めたお茶式の料理の御馳走になつたが、三四年前に輿入をしたと云ふ細君をも、照子は顏だけ知つてゐたことに氣がついた。

「あちらの面白い話を少し聞して下さい」など、、主人は器用な手容で照子に猪口をさしたりしてゐたが、はづんだやうな調子で應答をしてゐる照子の樣子には、稚昵みでなければ見られないやうな打釋けたところがあつた。

「是非一度行きます。その時には貴女に方々案内をして頂きます。」

唐物屋はそこの主人とも知つてゐる照子の宿へ來たときも、岩辻の手に入れた物の

品評などをしながら、さう言つてしばらく話して歸つた。
溫泉場へ引揚げてからも、その男の噂が時々照子の口から洩れてゐた。
「何でもありやしないわ。」
照子は二人の關係に疑ひでも持つてゐるらしい岩辻の問に應へてゐたが、自分の幼時の記憶に殘つてゐる其市とその男とを引放しては考へられないやうな氣がしてゐた。
「あんなことを言つたつて、東京へなぞ滅多に出て來やしませんよ。あれはお世辭ですよ。」
照子はさうも言つて笑つてゐた。
避暑にはまだ間のある溫泉場は、どこも客が少かつた。照子は湯場の土産だといつて、人から貰つたことのある木細工の玩具などから、名前だけ記憶に殘つてゐる此處の溫泉場にも格別の興味がなかつたが、附近にある山がゝりの水の流れや、白い顏を



した猥らな女達の姿のみえる色町の、夕方の氣分が物珍らしかつた。明るい玉突場や、床屋の前などに、浴衣を着た旅客がぞろ〳〵と歩いてゐた。照子は岩辻と一緒にその邊を一廻り彷徨いて歸ると、女たちの出迎へる別館の玄關口から、買つて來た瀨戸物などを提げながら、廣い自分の部屋へ入つていつたが、安逸な此の二三日の生活が自分の心と體を全く病氣にしてしまつたやうな懈さを覺えてゐた。眠氣がさして來るまで、照子は岩辻と差向ひで、碁盤に向ふのが、毎晩の例であつた。木蔭の深い庭を控へた二階の部屋に石の音が絶えてからも、二人の話聲がいつまでも洩聞えた。
もと來た石高な山道を、一行が車をつらねて街道の方へ出ていつた時分には、浸つてゐた湯場の空氣に飽疲れたやうな二人の心が、初めて蘇つたやうな歡喜を感じた。山や平野の綠が暫くの間に、めつきり濃くなつてゐることに氣がついた。

## 二十四

銀行の方の用事もあつたので、歸りにちよつと大阪へ寄ることになつた一行は、荷物を先に新橋へまはして、行きにも一泊した港の町から汽車に乘つて、その日の午後早く梅田の停車場へ着いたのであつたが、岩辻はそこでは一日を自分の用達や、知人の訪問に費し、二日を市中の見物や、文樂行に宛て、豫定のごとく四日目に東京へ立つてしまつた。

大阪の町は、もう眞夏のやうに暑かつた。靜な田舍に居なれた照子は、道頓堀と千日前の雜沓のなかに、落着のない數時間を費すと、天滿だの大阪城だのを車のうへから見てあるいたが、妻戀にゐる時分に、親しくしてゐた青年のことが、時々思ひ出せた。

「あの人はどうしたでせうかね。」

照子は宿にゐるときも、うろ覺えに覺えてゐるその男の住んでゐる町の方角を、女中に訊きなどして、折よくば自分のこゝへ來たことだけでも知らしたいやうな氣がし



てゐたが、自身で搜しに出て行くと云ふ決心もつかなかつた。法曹界で可也羽振がいいとか聞いた、その男の小父の名前すら、いつとはなく忘れてしまつてゐた。

「國から出てゐる辯護士といへば××が有名だが、それではないか。だがそんな男を訪ねて何にする。」

岩辻はさう云つたきりで、氣にも留めなかつたが、照子はそれとは似もつかぬその名前の思ひ出せないのが、慣れつたかつた。

文樂では天神記をやつてゐた。照子は聞つけぬ淨瑠璃や見なれぬ人形の動いてゐる、ごた〳〵した舞臺の氣分に、落着のない心が一種の壓迫を感ずるばかりで、東天紅や白太夫内の場などの場景も頭腦に入らず、優れた太夫連の聲調も、耳になづまないうちに、段數がづん〳〵進んでいつた。それでも寺子屋や、大切の廓文章にはいつとはなく興味を惹かれて、旅にゐることも忘れたやうに、夢心地で聞いてゐることができた。

照子は東京へ歸つて來てから、初めてその旅の面白かつたことに思ひ當るやうな氣がしたが、日取の都合で京を素通りにして來たことが、殘惜しかつた。

「京都見物も、かう暑くては遣り切れない。花でも咲いてゐる時分に又出直すとしよう。」

岩辻は切符を買ふときも、さう云つて思ひのほか手間取つたその旅行の終りを急いでゐた。

朝の間の停車場には、旅行の樂しさに浮々してゐる人の姿が、絡繹してゐた。輕い下駄の音にも、遠しい遊びに疲れた照子の心が、唆られた。帶ぎはに金鎖などを絡ませて、すつきりした身裝をしてゐる彼女の水際立つた姿が、田舍のむさくるしい停車場などの背景に見出すよりも、こゝでは一層岩辻の目に引立つてみえた。

新橋へ着いたのは朝早くであつた。藝者屋などの軒をならべてゐる裏町は、朝日が漸うじつとりした地面に、ちら〳〵しかけたばかりであつた。露の乾かぬやうな夏の



美しい花を滿載した、花屋の車などが物珍らしく目についた。怪物のやうな大都會は、どこへ行つても、まだゆつたりした朝の靜さに浸されてゐた。

家へ歸ると、佛壇に灯をあげて、朝のお勤めをしてゐた母親が、急いで奥から出て來た。照子は母親にお辭儀をすると、廣い家のなかを落着なく動いてゐたが、暫くぶりで見る部屋や庭に、また新しい安易が感ぜられた。一緒に俥をつけた岩辻は、茶を一杯飲むと直に出て行つた。

岩辻はたまつてゐる用事に體を取られて、それから二三日顏を見せなかつたが、照子も歸つた日の晩方に、本宅の方へ顏出をしたきりで、旅の話や、着物の始末などに、うか〳〵日がたつた。

照子の頭腦から、旅の氣分の全くとれてしまつたのは、體のやうやく閑になつた岩辻と、方々遊びに出歩いてからであつた。

## 二十五

本宅で偶に顔を合す機會のあつた、松野といふ師匠の娘の貞子の素振に、ふつと或厭氣が差しはじめて來たのは、照子の腹に第二番目の子供が宿つてから、大分たつてからであつた。

その師匠に、前後では可也な額にのぼる金を貸してあることは、岩辻の口から照子も聞いたことがあつた。舊は相當の暮しをしてゐた松野の未亡人は、少許りもつてゐた財産を、それを殖やさうとした慾心から、人に瞞されて悉皆ふぐつてしまつたのであつたが、その後始末の相談を、岩辻のところへ持込んで來た頃には、住古したその家すら危く人手に渡らうとしてゐるのであつた。岩辻はその家を抵當に、低利でいくらかの金を融通して、その急場を救つてやつた。

「私が話して取つてもいゝやうなところは、私が行つて催促しませう。」



貸金に關する書類などを調べてゐる岩辻の傍から、照子は口を出したが、その中には松野の分などもあつた。それをいくらか商賣にしてゐた頃からの引懸りもので、嚴重な公正證書が、幾束もあつたが、中には情誼一片で貸した口の非公式な書附も見えた。岩辻の財産は半ばそんなところから出來てゐるらしくも思へたが、世の中に名前を知らるゝやうになつてからは、それは幾んど止めてしまつた。最近には或學校の創立員のなかへなど、姓名をならべられて、少からぬ金を、基本金のうちへ寄附させられたりした。シルクハットやフロックの性來大嫌ひであつた彼も、近頃は羽織袴で押通すことのできない場合が多かつた。貴婦人らしい打扮をした照子と並んで撮つた、彼のさうした姿の寫眞が、照子には殊に氣に入つてゐた。

「お前にその口前で談じつけられたら、大抵の奴はまゐるだらうよ。」

岩辻はさう言つて、證書を照子に見せてゐたが、照子は金さへ取れゝば、少しぐらゐ惡く思はれても損はないやうな氣がしてゐた。

「少し法律のことさへわかれば、私にも出來さうだわ。そして取れたお金は、私が自分でよけておくわ。」

照子は物慾しさうに言つた。

「よして貰はう。岩辻が妾に高利貸をさしてるなんて言はれちや、外聞がわるい。まだお前のその調子で、ぱつぱとやられた日には、目にたつて爲樣がない。」

岩辻は笑つてゐた。

「それに松野のなんざ迚も取れる見込はないんだから、己も好い加減證文をまいて了はうと思つてゐる。」

「それも然ね。私が御母さんと二人きりで困つてゐた時のことを思へば、同情したいやうな氣もするわ。でもあの人達は、相當にお金が入るんでせう。」

「なか〳〵借金を返すといふところへは行かないね。貞子も何時までも、あゝしておく譯に行かない。」



岩辻はさう言つて、母子の身のうへを氣にかけてゐるらしく見えたが、照子はそれを意にも留めなかつた。

不快な暗示が、ある時彼女の胸に根をおろしはじめて來た。

それは或日の晩方、漸く愛嬌づいて來た千鶴子の手を引いて、本宅へ遊びに行つたとき、二階へ來てゐる二三人の客の前へ出てゐた貞子の、いつにない盛裝ぶりをして、勝手口へ出て來た姿を見た時であつた。

貞子はそれまでにも、勝手の忙しいときには時々來て、小間使のやうな役目に働いてゐるのであつたが、その時ほどきちんとした身裝をしてゐる事は、一度もなかつた。女學生風のよく似合ふ彼女は、髪を大きな廂髪に結つて、流行の色氣のお召の袷などを着てゐた。一月ほど見ないうちに、生際の狹い額つきや頰のあたりに、水々した色をもつて、丸く寸のつまつた指に、指環がいくつも光つてゐた。

## 二十六

以前から、更まつた客の前へは、餘り出たことのない松子は、その晩も下へ來てゐる自分の親類にあたる男と内輪話をしてゐたが、むづかしい顔をして勝手の方へ出てくると、千鶴子へのお愛想に、茶棚の鑵のなかから干菓子を取出して、小さい掌に載せてくれたりしたが、氣重さうに坐つてゐる照子を見ると、一層いら〳〵するやうな顔を顰めて、また奥の方へ入つて行つた。

照子は或印刷會社を經營してゐる、松子の親類に當るその男をよく知つてゐた。そして家を建てゝもらふ時に、意地悪な反對を唱へたのも武田と云ふその男で、千鶴子の籍の問題にも、岩辻の重な相談對手になつてゐたと云ふ事實から顔が合ふと厭味を言合つたりするのが例になつてゐたが、顔立などの綺麗な其男と話してゐるのは、そんなに厭でもなかつた。それで千鶴子に揶揄つてゐる彼の傍へ行つて、暫く話してゐ



ると、照子は直にそこを出たが、武田や松子の樣子にも、自身の不安を裏づけるやうな點のあるのが、氣にかゝつた。

「何といつたつて、子供のあるものが勝利者ですからね。」

武田は年の割に脊丈の伸びた千鶴子を膝に載せて、毛並の好いその髪を弄りながら言つた。重に岩辻の後援で行立つてゐる彼の印刷會社の事業が、順潮に向いてゐるらしいので、計畫の上手な男として、彼は岩辻の信用を得てゐたが、そこまで漕つけた彼の苦心を、思ひどほりに買つてくれない不平が、彼の心の奥深くに潜んでゐた。そして岩辻の性格を知つてゐる照子には、それが反つて同情できるやうに思へた。

「大將は他人には反つて好いんです。女に對しても男に對しても然うです。」

照子が此男から、厭味まじりにふとそんな不平を洩らされたのは、旅行から歸つた當座、自分だけの土産をもつて、一度その家へ訪ねて行つた時であつた。

「あの人はもと〳〵銀行家ですから、事業と云ふことには全く頭腦が働きません。だ

から、說き込んで頭腦へ入れるのが、骨でね。」

彼はさうも言つて、北國產れの岩辻の氣質の批評などをしてゐた。そして全くは彼に心服してゐない、自分の心持を洩した。

照子はその時分から、急に此男に親しみを感じるやうな氣がしてゐたが、離れてゐると、やつぱり氣の許せない男のやうに思へた。

「武田といふ人は、そんなに貴方が世話をしなければならない義理のある人なの。」

照子はいつか話のついでに、さう言つて武田の言分を岩辻に言告けて見た、彼を傷つけたいやうな惡戲な感情が、男の心を挑發することに興味をもつやうになつた、彼女の陰險な好奇心に手傳はれたのであつた。

岩辻は一應は笑つてゐたが、それでも氣がすまないらしかつた。

「いや、あれはね……。」

岩辻はさう言つて、長いあひだ面倒を見て來た其事業の行立や、武田と自分の關係



などについて話しだした。

「己は別に彼男に、不平を言はれるところはない。」

岩辻はさうも言つて、自分の立場を辯解した。

照子は默つて聞いてゐたが、岩辻の言分にも、どこか後暗いところがあるやうな氣がして、自分は自分だけの謀叛的な批判を持つてゐたが、男の心を攪亂すだけでも氣持が好かつた。

「でもあの人は、自分が大變損をしてゐるやうな事を言つてゐるの。」

「だから今時の若いものは、意氣地がないと言ふのだ。」

岩辻は笑つてゐた。

## 二十七

「貞子さんは此頃、始終あゝやつて來てゐるんですの。」

歸りがけに照子は松子に訊いてみたが、松子はやつぱりむつかしい顏をして、分明した返辭をしなかつた。

「然ういふ譯でもないけれど、あの人も家にゐたつてつまらないから來るんでせう。何だ彼だといつて高いものにつくんですよ。」

松子は投遣りなやうな調子で言つて、溜息を吐いた。

そして千鶴子に、「これからは此の御母さんのとこにお泊りするんですよ。もう照子さんのお乳なんか呑むんぢやなくてよ。」

月が重なつてくるにつれて、照子は子供に絡はられるのが厭になつてゐたが、乳が段々細り氣味になつて來てからは、一層子供に愛執が薄らいでゐた。

本宅の方へよこしてある千鶴子を、いつとはなしに照子の母親が、自分の方へつれて行つて了ふやうなことが多かつた。千鶴子はよち〳〵歩き出す時分から、重に祖母の懷に寢かされてゐた。祖母はその子供の肌を押つけてゐないと、懷が寂しいやうな



氣がして、松子の方へ渡し切にしてしまふことを厭がつた。子供は萎びた彼女の乳房を弄りながら眠入つた。

千鶴子は產の母親を、小母さんと言つたり、照子さんと呼んだりするやうに慣らされてあつたが、母親らしい感じは、やつぱり照子の方にあつた。惡戲な女中などに時時揶揄はれる彼女は、照子を眞實の御母さんだと敎へられても、賢しい目容をして頭をふつてゐた。

「はいちやい。」

照子は松子に甘えるやうにして、腰に絡はりついてゐる千鶴子に首を傾げてみせると、子供も「はいちやい」を繰返して、照子を見送つてゐた。

照子はこの頃そは〳〵してゐる岩辻の樣子などを思ひ合せながら、ぶら〳〵外を歩いてゐたが、何だか自分が放心つてゐたやうな氣がして、腹立しかつた。そして琴などの上手な貞子に對する、淡い嫉妬が感ぜられたが、それを壓潰すやうにして、わざ

と此頃往來をするやうになつた、本郷の方の友達の方へ足を向けた。
あの當座、よく何彼の打明話をしてゐた澤夫婦と、照子はしばらく隔たつてゐた。此頃の自分の榮耀な暮しが、夫婦の目にどんな風に映つてゐるかを、照子に考へさせるやうな場合が時々あつた。
「今のうち少しづゝ心がけて始末をしておかないと、駄目だぜ。何時までも若くてゐられると思ふと、飛んでもないことになつてしまやしないか。」
訪ねる度に、新しい着物などを見せびらかさないではゐられない照子は、さう言つて苦い顏をしてゐる澤の辭に、一種の反感を覺えた。それに田舍でも聞いてきたとほり、自分の友達の一人で、近頃東京へ緣づいて來てゐるその女の家庭に、迎へられるやうになつてから、自分の生活に嫉妬の目を向けてゐるやうな、澤を訪ねる興味が全くなくなつてしまつた。
「長い目で見てゐて下さい。私だつて此方の子供衆の一人や二人引受けて、屹度世話



をしますから。」
照子は澤の夫人がこぼしてゐる世帶話などが出ると、それが全く自分の義務でゞもあるやうな氣がして、然う言つて慰めてゐたが、澤の玄關も、此一二年のあひだに、滅切藥取が殖えて來てゐた。親切な小兒科の醫者として、そつち此方の家庭に可也な人氣を得てゐた。
友人の家は、澤のすぐ近くにあつた。そして辻で傭つた俥に乘つて、照子が訪ねていつた時、座敷の方にゐた彼女は、直にその音を聞きつけて座を起つて來た。結婚してから、まだ一年にもならないほどの二人の新しい家庭が、照子には物珍らしくて安易であつた。

## 二十八

雪子といふその友達は、髪をいつにない丸髷に結つて、顏にも白粉をこて〳〵塗つ

て、良人の机の前に坐つてゐたらしかつたが、照子を迎へ入れると、急いで手紙などの散かつてゐた机のうへを取片着けなどしてゐた。田舍では可也な名望家の娘だが、東京で學生生活をしてゐるうちに、私立大學出の今の良人と一緒になつて、家を持つたり、着物を拵へたりするについても、田舍から可也の金を取寄せてゐたが、少い良人の俸給では月々の生活費にも足りなかつた。

照子はおとなしさうな其良人にも度々逢つて、一緒に碁を打つたり、花を引いたりしてゐたが、教育家が目的であつたやうな雪子の生活氣分が、遊びなどを知つてゐる彼の心持にそぐはぬらしく見受けられた。

「あなたに少し仕込んで戴かなくちやならない。」

男はさう言つて、照子の前で、如何しても意氣人柄には作れない自分の妻の髪容の駄目を出してゐたが、人の好い雪子が、出來るだけ良人の氣に入るやうにと、氣をつかつてゐる樣子が照子には可憐しく思へた。照子は何も彼も明けすけに話して聞せる



雪子から、二人が一緒になつた事情なども話されたが、簞笥に一杯つまつてゐる衣裳なども、時々見せられた。

「こんな野暮くさいものは、みんな賣つてしまへつて言ふんですけれど、でも賣つてしまへばなか〳〵代りが出來ないでせう。」

雪子はさう言つて、山の手好みの羽織の裏などを引くらかへしてゐた。照子より二つも年上の雪子は、顏も醜く體も節々が約つてゐた。髪だけはたつぷりしてゐて、皮膚の細いのが取柄であつた。

「偶然としたら今夜も歸らないかも知れないの。」

雪子は氣はづかしさうに顏を赤くして、不意にそんなことを言出したが、外に眤みの女があるので、獨りで氣を揉んでゐるらしく思へた。

「だつて貴女の旦那は堅さうだから安心だわ。それに氣が優しいでせう。」

照子は涙ぐんでゐるやうな友達の笑顏を見ないやうにして言つた。雪子はそこへ有

りたけの水菓子などを持出して、小刀で皮をむいて照子に侑めた。
「さう見えるでせうかね。」
雪子は驚いたやうな目をあげて、照子の顔を眺めてゐた。狹い庭に蟲が啼いて、月影がさしてゐた。
「だつて然うぢやないの、私は貴女を可羨しいと思ふわ。」
「然うですかね。」
雪子は一層赤くなつて、吐息を吐いてゐた。
「それに貴女の旦那はまだ年が若いんだから、少しぐらゐの道樂は、大目に見てゐなくちや。」
「私もさう思つてゐるんですけれど……あの人は私に愛情があるとは思へませんの。何だか瞞されてゐたやうな氣がしてならないの。私は自分の方針を誤つたのぢやないか知らと思つて、今も熟々考へてゐたところよ。」雪子は聲に力を入れて言ひ出した。



「それは貴女が大袈裟に考へるからだわ。」
照子は笑つてゐたが、雪子の話に身を入れる氣にもなれなかつた。
「それに私は、あの人のために何のくらゐ物を亡したか知れやしませんわ。それも必要なことなら裸になつても介意やしないけれど、それがあの人の不品行を働く入費になるんですから、全く詰らないと思ふわ。」
雪子はそんな愚痴を零しながら、時々表を通つて行く、靴の音などに耳を引立てゝゐた。

## 二十九

時間がいつとはなし經つていつた。
照子は急に世間の寢靜まつたのに氣がついて、暇を告げやうとしたが、雪子は先刻

机のうへで押隠すやうにした質屋の通帳まで出してみせなどして、照子を引留めた。
「ほんとにお可恥しいんですよ。質屋の通なんか私産れて初めてだわよ。」
雪子は目に涙を入染ませながら言つた。
「今夜貴女の旦那が歸つて來たら、私が忠告してあげませう。」
照子はめそ〳〵した雪子の心持が齒痒いやうな氣がして、然う言つて力をつけた。
「そんな事までされて、貴女が默つて屈從してゐることはないわ。」
「不可ません〳〵。」雪子ははら〳〵するやうな聲を出して打消した。「そんな事をすると尙不可ないわ。私が貴女にこんなお話をしたことは、言はずにおいて下さい。」
照子は家の方も氣にかゝつたが、時間がおそいのと雪子が寂しがるのとで、一晩泊つて行くことに決めて、雪子に手傳つて戸締などをすると、臥床を敷いて、雪子の出してくれた寢衣に着替へやうとしてゐる處へ、高い靴音が門にとまつて、彼女の良人が歸つて來た。



「はい〳〵」と、雪子は帶しろ裸で、周章て飛んで出たが、威勢よく上つて來た男は、二つならべて敷かれた臥床の傍に悄然坐つてゐる照子の姿が目に入ると、極りわるさうに机の前へ來て坐つた。
「いゝです可いです。どうぞ其のまゝ。」男は照子に言つたが、雪子はうろ〳〵して、良人の着替などを捜しながら、傍へ寄つて來ようともしなかつた。
「貴方は隨分お歸りが遲いんですのね。雪子さんが如何なに氣を揉んでゐたか知れやしないわ。」
照子は帶を締直しながら、そこへ坐り直した。
男は酒氣を帶んだ蒼い顏をして、莨を喫してゐたが、さう言はれても腹もたてずに、にや〳〵してゐた。
「雪子さん、野村さんがお歸りになつたら、もう可いでせう、私歸りますわ。」
「まあ、こんなに遲いのに。」

雪子は赤い顔をして照子の顔を眺めてゐた。そこに肱をついて、横になつてゐた野村も起直つて、被布を着てゐる照子の姿を眺めてゐた。眉などが薄く鼻の鋭くなつた、その顔がいつもより權高にみえた。

暫くすると、照子は二人に送られて、切通の下の方へ出て來たが、町はどこも彼處も淡い濛靄の底に閑寂してゐた。それでも人通は全く絶えてゐなかつた。伸のあるところまで、二人はついて來たが、照子は廣い座敷へ歸つて行く自分を考へながら、寂しい車輪の音の、興奮したやうな頭腦に、惡く響いて來るのを感じた。小さい時分から、物事に無頓着であつた雪子が、男で苦勞してゐるのも不思議のやうであつたが、二人のなかへ入つて行かうとした自分の氣持も、莫迦々々しかつた。

家へ歸ると、母親は直に戸をあけに出て來た。

「そんな體をして、今時分まで何處に何をしてゐたのです。」

母親は上つて行く照子のあとから、戸締をしながら窘めた。



「どうも千鶴子が寢なくて、今まで私は負ぶしどほしたの。」

本宅で、一寢入してから目をさますと、急に祖母の方へ歸らうと言出して肯かない千鶴子をつれて、岩辻が十一時頃にやつて來て、十二時過までゐたことが、母親の口から話し出された。

「私はお陰で、あの人に小言を言はれましたよ。老人がついてゐて、そんな亂次のないことでは困るといつて。」

母親は屈託さうな顔をして、マッチで莨をふかした。

## 三十

照子は火鉢の傍で、暫く話してから自分の寢床へ入つて行つたが、頭腦が興奮して容易に眠れさうになかつた。

「だから今の中、自分だけの財産をちやんと決めておいてもらつた方が安心ですよ。」

母親は照子から貞子のことを聞くと、不安さうな顔をして言つてゐた。
「お前もうかゝしてゐないで、決めることはてきぱき決めておかなくちや駄目だよ。お腹を痛めた子供はみんな取あげられる、年は取る、外に女ができたといつて、少し許りの手切金で突出されでもした日には、それこそ世間の物笑だよ。」
母親はいつも言つてゐるやうなことを、また言出した。自分の所有としての照子には、可也切れ放れのいゝ岩辻も、母子の前途に對しては、何の保證をも與へようとしないことが、薄情のやうに思へた。
「私だつて好い年をして、いつ迄もあの人達の御機嫌取をして暮すのは厭ですからね。」
母親はさうも言つて、また昔のことを繰返してゐた。
事毎に岩辻の悪口を言はないでは氣のすまないらしい母親に對する反感を、照子はその時も口へ出さずには居られなかつた。母親は何時も飲むことにしてゐる晩酌の醉が、すつかり醒めて、始終胃病で惱んでゐながら、好きな濃い茶などの色の影響から



來るらしい皮膚の黝黑な顏が、一層神經質に見えた。
香の高い好い茶を、彼女は其時も、吸子に一杯入れて飲んでゐた。食物などにも、おそろしい贅澤を言ふやうになつた母親は、松子たちの目にあまるやうな店屋物などをお膳のうへに並べて、皮肉な小言に女中を困らせながら、ちびゝ晩酌の盃を取あげてゐた。
「こんなに出るお茶を棄てゝしまつちや、勿體ないぢやないの。」
照子は時々母親の頑張つてゐる火鉢の傍へ坐ると、こぼしのなかを眺めて笑つたが、母親はいくらも飲めないお茶なぞにまで、喙を容れられるのが不平さうであつた。
「琴をみつちり稽古してみよう。」
照子は寢られぬまゝに、貞子に對する策戰などに頭腦を疲らせながら、そんな事を考へてゐた。琴などで貞子に鼻をあかすのは、何の雜作もなささうであつた。
三時を聞いてから、漸くうとゝと眠りかけたかと思ふと、夢とも現ともわからず

に、岩辻の聲が耳に入つたやうな氣がして、急に目がさめた。
出て見ると、洋服を着た岩辻が、御飯を食べてゐる千鶴子の傍に胡坐をかいて、母親と昨夜の話をしてゐた。
「お早うございます。」
照子は寢衣のまゝで、そこへ坐ると、煙管を取あげて、脹れぼつたいやうな目に、岩辻の顏をしげ〳〵眺めながら言つたが、岩辻は家に寢てゐた照子を見て、いくらか機嫌が直つてゐるらしかつた。
岩辻が車で出て行つてから、照子はまたしばらく眠つた。

## 三十一

岩辻が下谷を根據として、或年の春の選擧界に打つて出たときには、照子も綱曳の俥を飛して、それから夫へと賓緣を求めて、熱心に有權者の訪問などに働くのが、彼



女に取つて意ひのほかの興味であつた。
その頃には、男の子だといふので、一層岩辻から悅ばれた二番目の子供が、もう片言まじりに口などを利くやうになつてゐたが、それにつれて照子の生活もめき〳〵膨脹してゐた。子供は乳母やお附の女中の手から手に育てられた。
不斷から親しくしてゐる區の有志などから、最初彼を推薦する旨の意志を通ぜられた時には、岩辻はまだ氣が決まらずにゐた。そして運動に費さるゝ莫大の金について考へない譯に行かなかつたが、金ばかりに執着して來た彼の心が、劇しくそれに衝動かされた。
「四五萬圓も棄てる氣なら、譯なく成功する。」
さう言つて目算を立てゝゐる岩辻の話を聞いたとき、照子自身にも不思議な興味が唆られた。
「四百や五百の投票なら、私にだつて取れないことはないと思ひますわ。」

照子は自分が頭を下げて行きさへすれば、いつでも物になりさうな家が、いくらも有りさうに思へた。應對や風采や、手紙を書くことに自信のある彼女は、松子や貞子よりも、自分の力がどのくらゐそんな仕事に適してゐるか知れないと考へた。

貞子問題などで、お産後しばらく湯治にやらせられたりして、ぶら〳〵してゐた照子は、別の師匠を家へ呼んで、琴の稽古などに熱中して、一年ばかりを過して來た。そんな事に可也怜悧な頭腦を持つてゐる照子は、めき〳〵腕をあげて行つたが、岩辻が貞子に限らず、その頃手斷をやつて緣を切つたと言ふ、外の女の問題などでも、可也な刺戟と動搖を感じさせられてゐた。

山と海とに近い溫泉場で、三週間たらず保養してゐるあひだに、そんな女の問題が岩辻の家庭に起つてゐることを、照子は暫く遊びに來てゐた母親から聞いたのであつたが、月々決つたものを配はれることになつてゐた貞子の古い住居が、大工を入れて二階や外圍ひを立派に手入をされたことなども、その時初めて知つたのであつた。



「あの人も少し亂次がなくなつて來たよ。」

母親は、酒に醉つてくると岩辻が手をやいたと云ふ女の素姓などを、繰返し話しながら言つた。貧しい大工の娘だつたといふその女は、長いあひだ旦那取などをして、體も心も荒びきつてゐた。それを勸めたのは、照子も一時は出入させてゐたことのある女髮結であつたが、箱入娘のやうに作つてゐた女の素姓が、直に岩辻に感づけて來た。附いてゐたごろつきのやうな男から可也な金を强請られたことなどが、母親の口から面白さうに話された。

「あの人のことだもの、女を持つならいくら持つたつて介意やしない。切めて貞子さんぐらゐなら我慢もできるけれど……。それといふのも餘りお金にけち〳〵するからですよ。」

母親はさうも言つて笑つた。

「そんなお金があるなら、私にも少し湯治にもやつて下さいと、私は松子さんにさう

言つてやつたのだよ。」

そんな話にも飽いてくると、母子は綺麗な身裝をして、湯場の町を歩いたり、一晩泊りで母親のまだ見たことのない、熱海の方へ遊びに行つたりして日を暮した。

寒いをりの溫泉場は、どこへ行つても客が込合つてゐた。

## 三十二

その時の照子は、そこの溫泉宿の別館で、廣い部屋をぶつこ抜きで二室も取つて、乳母つきの幼兒に若い女中を一人つれてゐたので、長い滯在の間、退屈するやうなことはなかつたが、母親が來てからは、一層時のたつのが早かつた。

東京から持込んでいつた蓄音機のなかには、岩辻の好きな長唄などがあつたが、照子は雨などの降るじめ〳〵した日には宿の主人がどこかの別莊で工面して來てくれた琴を取出して、お溫習に時間を消したりした。女中や男衆の出入の多い部屋のなか〻、



いつも陽氣に賑つてゐた。

「こちらは何時でもお陽氣で好うございますね。」

部屋つきの女中は、眤みになつた照子たちに晩飯のお給仕をしながら、赤子にかゝつてゐる乳母や女中にお愛相を言つた。

「でもこんな山のなかに、三週間もおかれちや堪らないわ。」

照子はさう言つて笑つてゐたが、熱海へ遊びに行つてからは、そこの明い空氣に氣が變つて、早くこゝを出て行きたいやうな心が動いた。熱海や伊豆山では、全く遊びに來てゐるらしい、樂げな都會人の姿が多く目についた。二週間弱の入湯で、生活機能のめきめき恢復して來たことが、汽車などに乘つてみると、よく解つた。

「十分體をよくしなさい。」

他のことは左に右、健康だけには殊に能く氣をつけてくれる岩辻に勸められて、こゝへ來るときにも言はれた辭を時々思ひ出して、獨りで湯槽に浸つてゐる時などに、

透通てみえる自分の白い體を眺めながら、お產ごとに黝く弛みをもつてくる腹部の皮膚に、淡い哀愁を感じてゐたが、それはそれとして機能の亢進していくのが、心臟の健かな鼓動にも感ぜられるやうで、氣持がよかつた。

「秋頃になると、またこの毛がぬけるんだ。厭だね。」

照子は湯上姿で、床の間の姿見の前に坐りながら、如何かすると目にとまることのある、自分の更けた面差にふと厭な氣がさして、やゝぬけ上り氣味になりかけた額の生際へ手をやりながら、傍にゐる母親に呟いたが、やつぱり自分の顏は美しいと思つた。

「少しぬけた方が、髷の形がよく取れますよ。お前は大體子供の時分から髮が多過ぎて困つたくらゐでしたからね。」

母親はさう言つて可憐さうに娘を眺めてゐた。

雨でも降つて來たやうに、水音の高く聞える夜更に、照子はふと寂しい夢がさめたりした。行燈の灯影の薄くさした廣い部屋の天井などが、物哀しげに目に映つた。母



親が小い髷や筋張つた長い頸を見せながら、後むきになつて、すや〳〵と眠つてゐた。髮の半分をも占めてゐるらしく見える白髮が目についた。

まじ〳〵睜つてゐる照子の目に、岩辻と一緒にゐる貞子の色々の場合の姿が浮んで來た。部屋にゐる彼女や、外歩きをしてゐる二人の樣子が想像された。そして其が不思議なほど氣にかゝつて來た。いつの程からかそんな氣持になつてゐる自分が、可笑いやうであつた。

「お前はあの時も處女ではなかつた。少くとも己にはさうは思へない。」

照子は色々の場合に、詰るやうに揶揄ひ面で言つた岩辻の辭を、深く氣に留めたこともなかつたが、男の疑りぶかいことが感ぜられた。

「如何せ私のことですから、貞子さんのやうには行きませんわ。」

照子はさう言つて、岩辻と痴話喧嘩に夜を更したことなどを想ひ出した。

「あの人こそ、何をしてゐたか解つたものぢやありやしない。」

照子はその時、躍起となつて悪口を吐いて、岩辻を手甲擦らせた。
「貴方は、どのくらゐ女に甘いかしれやしないわ。」照子は終ひには岩辻を怒らせてしまつた。

## 三十三

選擧運動で、多くの人と觸れる機會のあつた照子が、その或一人と祕密な關係に陥つたことを、岩辻に知られるまでには可也の月日が經つた。

澤の顏を利してゐる本郷方面などが照子の重なる働き場所であつたが、彼女の手は賓緣を求められる限り、どんな方面へでも伸びて行つた。紹介を求め得る範圍の家へは、照子はどこへでも名刺を持つて顏を出して行つた。澤の出入をしてゐる病家先や、花や琴の師匠の知つてゐる家なども、可也多かつたが、髮結や出入の商人などにも、脫目なく名刺を配らせるのに、不思議な智慧が働いた。



岩辻の銀行から金などを借りてゐる、同郷出の或洋品店屋の主人が、選擧運動の上手なところから、岩辻のために投票を集めることに骨を折つてゐたが、神戸の商業學校卒業だといふその男の持つてゐる麴町の方の店へ、照子も選擧の運動をするやうになつてから、一度訪ねで行つたことがあつたが、區會議員などをもしたことのある彼は、選擧運動について可也な經驗をもつてゐた。

運動員のなかに重んぜられてゐる、萩原と云ふその名前を、照子は初めて選擧事務所で聞いて、親しく逢つてみたのであつたが、商人風の身裝をして、腰などの低い彼は、若い時分から政治狂であつたことを、自分の矜にしてゐた。岩辻に言はせると、「あれは山師で我利々々亡者だ。」といつて顏を顰めるのであつたが、萩原に聞くと、代議士などに打つて出るには、岩辻も餘り好いこと許はしてゐないと云ふのであつた。

「でも運動費があるから確です。一度ぐらゐは出しても可いでせう。」

萩原はさう言つて、自分がうんと力瘤をいれさへすれば、如何にでもなるやうな意

氣込を示してゐた。

もと商賣人であつたと云ふ、萩原の細君とも、照子は數度顔を合す機會があつたが、萩原と全く親しい口を利き合ふやうになつたのは、選擧の形勢もほゞ見越しがついてからであつた。

照子は重に麹町の事務所に頑張つてゐる萩原と、偶に運動上の打合せをすることがあつたが、全體に渉つての形勢を知らうとするには、この男が確實な知識を持つてゐるらしく思へた。

「恐入りますが、今日是非とも此方面へ貴女に來てゐて戴かないと困るんですがね。」

萩原は、照子が本據地の事務所につめてゐる時などに、電話で彼女を呼寄せたりしてゐたが、一緒に有權者の訪問に歩く機會も少くなかつた。

牛込の方を、ある日二人は伸を乘棄てゝ、ぶらぐ歩いてゐた。落ちてゐる投票を、二人はその邊まで嗅ぎつけて、獵りに行つたのであつた。岩辻の地盤は、それまでに



十二分に堅められて、成功の見込がすつかり立つてゐるのであつた。

「復といふこともありますから、是からあの方面を少し當つてみませう。どうせ次期の豫備ぐらゐのところですから……。」

萩原はそれで照子と手別をして、そつち此方に散らばつてゐる有權者を訪問してから、一緒に落逢つたのであつたが、そんな事で照子が此男と連になつたのは、これまでにも幾度かあつた。事務所では差向ひで碁盤に向つたこともあつた。一緒に物を食べたこともあつた。

「貴方こそ如何して代議士にお成んなさいませんの。」

照子はこの男から、政治や事業の話などを聞かされて、さう言つてその風采に見惚れてゐるやうなことがあつたが、男は區會議員をしてゐた頃の、自分の失敗などを話して、當分その方の野心はないやうな口吻であつた。

「だが此の運動といふ奴は、一度やると止められない面白いものです。これも私の道

樂の一つかも知れません。」
彼は笑つてゐた。

## 三十四

照子が萩原と一緒に入つて行つた、四谷見附の肉屋を出た頃には、濠端の空に春めいた星が漸く瞬きはじめてゐる時分であつたが、行きにぶら〳〵話しながらそこ迄歩いて行つた彼女の顔には、疲勞と酒の醉とが出てゐた。

「でも今度の貴女の働きには、皆なが感心してゐますよ。」

萩原は日暮方の長い濠端を、女に話しかけながらのろ〳〵歩いてゐた。

「駄目ですわ。經驗がないんだから。」照子はお產後、夏の頃から氣づいた輕度の近視眼に、懸ることにしてゐた金緣眼鏡などの能く似合ふ、鼻筋の通つた細面に淋しい笑を湛へながら應答をしてゐたが、平生世間と全く沒交渉で暮してゐる松子などより、自



分の方がどのくらゐ顏が廣いか知れないと思はれた。押出や品格などの人の目に立つ處から、松子には勤まらないやうな同鄕の婦人會などへ、岩辻は照子の出て行くことを一つの矜りとしてゐた。

「何分境遇が境遇ですから、出て行きたいやうな場所へも、自然遠慮がちになりますし、少し何かしようと思へば、傍から故障が出たり何かして、何彼につけて窮屈な思ひをしなければなりませんの。今度だつて、女側で一生懸命になつてゐるのは、私くらゐのものでせう。どうかあの人を、立派な人物にしたいと思つて、かうして駆ずりまはつてゐるんですけれど、誰もそれほどに思つてくれるものはありません。」

「岩辻さんが認めてくれるでせう。そして褒美には金の一萬圓もくれるでせう。貴女には流石の岩辻さんも、大分のろいと云ふ話だから。」

「如何してそんなぢやありませんのよ。」照子は打消して、「私は十七の時からあの人の世話になつてゐるんですけれど、自分の財產といつては、着物や指環があるくらゐの

ものでせう。それは私も岩辻との關係ですから、現在は何一つ不自由なく暮してゐますわ。そのために非難も受けてゐるでせうけれど、爲方がありませんわ。私は松子さんなんかと全く立場が違ふんですもの。」

照子は不思議に興奮したやうな調子で言出した。

物を食べてゐるあひだも、そんな話が二人の間に續いた。

「私はこんな境遇にならうとは思つてもみませんでした。藝妓屋にこそ暫くゐましたけれど、こんな筋であの人の世話になるつもりは少しもなかつたんですもの。」

照子はいくらか口にした酒がまはつてくると、何時にない感傷的な調子で、話しつづけた。

「然うでせうな。失禮ながら私も初めてお目にかゝつたときから、此は何か餘程深い因緣のある婦人だと思つてゐました。夫にお手紙なんかを拜見すると、手蹟も誠に見事で、どこへ出しても立派な貴婦人でとほる婦人だと思ひました。學校でも餘程おや



りになつたものかと、想像してゐたくらゐです。」

「學校はほんのね、それでもまだあの時分は年がいきませんでしたから、岩辻が立派な人間なら、そのくらゐの世話をしてくれても可かつたんですけれど……昔しはあの家も隨分お金に不自由してゐたさうですから、私の父には世話になつてゐるつて話ですけれど、それも時節だから爲方がありません。」

「全く金の力にや敵ひませんな。」

そこを出てから、直に照子は俥で送られて歸つた。

「どうぞちよく〳〵お遊びに入して下さい。また面白い話もありますから。」

男はさう言ひながら彼女を見送つた。

## 三十五

選擧が濟んでからは、當分顏を合す機會もなくて過ぎて來たその男のところへ、照

子がふと訪ねて行つたのは、その夏の七月頃であつたが、春以來岩辻の處へは顏出もしなかつた萩原は、思ひがけないやうな顏をしてその時彼女を迎へた。

四人ばかりの中僧と小僧をおいて、些と大きくやつてゐた彼は、堅氣の商人めかした顏をして、店の高いところから照子の顏を眺めたが、あの時とは全然調子が變つて、何となくむつつりしてゐた。

「ちよつとお店の前を通りましたから……。」

人目に立たないやうな身裝をしてゐた照子は、四谷の叔母を訪ねた歸りだと云つて、手土產の菓子折などを提げてゐた。選擧後の謝禮のことなどについて、岩辻はこの男の事を餘り好くは言つてゐなかつたが、照子もあの時うか〳〵と身上話などをしたことが、淡い後悔となつて殘つてゐた。それがまた妙に此男の方へ心を惹き着けさせてゐたのであつた。

照子が往來向の二階へ通される時に通つた奧行の淺い住居の方に、丸髷姿の細君の



姿が見えてゐたが、取亂してゐたので、碌々落着いて挨拶もしなかつた。照子は此の女房のことについては、萩原から一言も話を聞いたことがなかつたが、店へなぞ出てお客にお世辭などの言へさうな女には見えなかつた。

夫婦の住居にしてある二階には、簞笥や茶棚などがおかれてあつた。植木などをおいてある物干には、三時頃の暑い日がかん〳〵照つてゐて、裏には黑い庫の壁が見えてゐた。

「その節は色々お骨折で、お蔭で非常な好成績でございました。」

照子は自分自身にも、自分の働き振に對する周圍の人達の感情に、飽足りない感じをもつてゐたのに、萩原などにも自分としてはまだ一度も挨拶に出なかつた事などを、心苦しく思はないではなかつたが、そんなに氣を利かしても、それが表面自分の體に何の箔をもつけないことを考へて、その儘に過ぎてしまつた。それでも手紙だけは書いたのであつた。

「如何致しまして……。」
萩原は苦走つた口元をきつと結んだきり、多くは語らなかつたが、暫くたつと目の色などが和いで來て、アイスクリームに匙をつけながら話が少しづゝ釋れて行つた。
「貴女の前ですけれど、岩辻さんはどうも些と解らないところがありますな。」
照子は別に驚きもしなかつたが、やつぱり顏が赤くなつた。
「何かきつとお腹立のことがあつたんでせうね。」
「何に、私なんざ別に選擧運動を商賣にしてるつて譯ぢやないんですから、それは可ござんす。根が唐物屋が本業で、あれは道樂なんですから。」
萩原はやつと切長な目元に愛嬌笑ひを見せた。
「でもお忙しいところを、一月も二月もあゝやつて奔走して戴いたんですもの、物數奇ばかりで出來る仕事ぢやございませんわ。」
「それもですね……。」萩原は滿々たる不平を目の色に見せて言出した。「あの人が、天



下の名士とか何とか言ふのなら、それはまた義務として、此方が自腹を切つたつて介意やしません。多少はそれは、市に功勞のある人でもありませうけれど、大體は金力で出ようつていふ人なんでせう。」
「え、さうですとも。」

## 三十六

選擧運動に、意ひのほか自身を發揮し得たやうな氣がしてゐた照子は、是といふ考へもなしに、何とはなし世のなかへ出て見たいやうな氣持が動いてゐた。毎日人なかへ出歩いてゐた習慣が、選擧騷ぎが鎭まつてからも、今迄のやうに、彼女を家にばかり落着かせておかなかつた。
その當座、照子はそのをりに顏を知るやうになつた二三婦人の家庭を、訪問するのが物珍しかつた。中には岩辻が照子に交際させるのを厭がつてゐるやうな連中もあつ

たが、自身の利害關係などから、然するのを悅んでゐるやうな向もあつた。けれど終には、その興味も次第に薄らいで、自分がそれらの家庭へ入つて行くのを、餘り悅んでもゐないものゝ多いのに失望させられた。

ある辯護士の家庭では、照子はどこの家よりも開放的なそこの安易な氣分に唆かされて、子供などをつれて遊びに行つたが、快活な主人と打釋けた話をしてゐる照子の明け透けな調子などに厭氣がさして、夫人が嫉妬の目を以て自分を見てゐることに氣がついてから、自然に足が嚮かなくなつてしまつた。それで照子はまた澤や雪子の家庭などを、自分の遊び場所としてゐたのであつたが、世帶にばかりかまけてゐる其等の女たちとの交際が、時々飽き足りなく思へた。

「私は何かかう多勢人を集めるやうな商賣でもしてみたら、きつと成功すると思ふの。」

照子は思ひだしたやうに、岩辻に訴へてみた。



夏の初頃から、女がまた一人殖えてゐた岩辻は、時々自分を獨立させろといつて照子に責められてゐたが、照子を信じないらしい岩辻は、それを眞面目な問題にしようともしなかつた。

「それでは日本橋あたりへ待合でも出すかね。」

一度などは岩辻は笑談にそんな計畫を立てゝ、その費用を見積つてみたこともあつたが、子供の教育と云ふことも考へられた。照子の心がどんな方へ移つて行くかもしれないと云ふ不安もあつた。

「そんな浮いた心が私にあるくらゐなら、あの時藝者屋を出てくる筈がないぢやありませんか。」

照子はその商賣にも心が動いてさう言つて辯解したが、無駄であつた。

「それぢや小間物屋でも出したら如何でせう。」

「駄目だね。」岩辻はやつぱり對手にならなかつた。

「湯屋がさん助でなくちや出來ないと同じやうな譯で、その道で叩きあげて來た腕でなくちや、買出一つすることもできやしない。銀行會社の頭取だとか理事だとか云ふ己たちの地位だつて、給仕から仕あげたくらゐでなけれあ、實際の仕事ができやしないのだからね。」

岩辻はさういつて、また自分の出世談の方へ話を引張つて行つた。

照子はそんなことで、窮屈な自分の立場をまた痛切に感じて來たのであつたが、やつぱり抑へきれないやうな物足りなさがあつた。

自然に足の向いて來た萩原の店頭へ立つたときにも、照子は興味ある目で、物綺麗な店つきを眺めてゐたのであつたが、萩原自身とは、あの時からみると、また一層隔てがとれたやうな調子で、話をすることが出來るやうに思へた。

「唐物屋などは、ハイカラで綺麗な商賣ですね。儲けも太いと云ふぢやありませんか。」



選擧の話もすんでしまつてから、照子は言出した。

「先ね。」萩原は商賣の話などには興味がなささうな顔をしてゐた。

## 三十七

「私も何か商賣でもしてみたいと思ひますけれど、此位の店を張るのには、なかなか資本がかゝるでせうね。」

照子は自分が店に坐つて、顧客を待つときの心持などを想像しながら言つた。

「さうさね、精算してみたこともありませんが、是れでざつと五千や六千の代物は店に寢てるでせう。」萩原はさう言つて、不安さうな目色をしてゐたが、戰爭前後から滅切不景氣になつてゐた其店の維持が、近頃一層困難になつてゐることなどを思ひ出してゐた。照子も岩辻の關係してゐる銀行のことから、こゝの店の內幕を薄々知つてゐた。始終株などに手を出してゐる萩原の商賣の堅くないことも岩辻から聞かされてゐ

たが、左に右そんな難關を平氣で切脫けく〳〵して行くところに、此男の手腕も興味もあるのだと思はれた。

「此ももと〳〵私が義理で、人から讓受けた店ですが、貴女が商賣をやる氣があるなら、都合でこれを讓つてもいゝね。」

萩原はさうも言つて笑つてゐた。

「私一人の腕で、こんな店は迚も引受けきれませんわ、一萬の餘もかゝるでせうから。」

「だが、貴女がやらうといへば、岩辻さんがお手元金を出してくれさうなものです。」

「それがなか〳〵然うはいかないんです。岩辻は私に商賣なんかさせるのを酷く劍呑がつてゐますから。」

「尤もあの人から言へば、貴女に商賣なんかやらせる必要はないんですからな。」

「つまり然うなんです。それならそれで、私の一生涯安心できるやうな保證を與へて



くれゝば可いんですけれど、此頃のあの人の遣方は、まるで私の顏を潰すやうなことばかりなんですの。」

「他に女でもできたといふんですか。」

「然うですとも。あの人は年中そんなことばつかりしてゐるんですわ。」

「だが、そんな事をして、あの細君がよく我慢してゐると思ふね。貴女に對しても、岩辻さんのすることを、よく默つてみてゐると思ふね。」

「默つてみてなんかゐるものですか。」照子は長いあひだの松子との感情の觸れあひを考へながら言つた。

「私にしたつて滿りませんわ。岩辻の抑もの約束と云ふのは、私があの人の世話になるについては、妻も悅んで承知をしたのだから、少しも遠慮するところはないなんて言つておきながら事實はやつぱり干涉がはげしくて、母や女中のことにまで喙を容れるんですから。」

「それは爲方がない。あの人の身にもなつて見なければ……。」
物干から次の室の廊縁の板敷にまで射してゐた日がかげつて、蒸暑かつた部屋に涼しい風の流れるころに、照子はそこを出たが、愚痴話をしてゐるうちに、自分が祕密で人に融通してある金の取れないことなどが、彼女の口から洩れたりした。その金は、照子が何かのをりに除け〳〵して預けておいた三千圓ばかりの祕密金の幾分であつた。岩辻に祕密で融通したその金を取返す方法について、照子はこの頃可也頭腦を惱ましてゐた。澤の細君などの中に立つてゐる、その貸借關係がいつか直接相對の事件になつてゐた。
「私は三百屋のやるやうなことは、自分の名譽にかけても御免蒙りたいが、しかし取れないこともありますまい。」
萩原はさう言つて、首を傾げてゐた。
「とにかく一度證書を拜見さして頂きませうか。」



「大したお金でもありませんから、私も思ひきつてゐるんですけれど、取れるものなら取つて戴きたいと思ひますわ。」
そこを出たとき、照子はそんなことで、妙な引つかゝりを此男につけてしまつたことが、不安なやうな氣がしたが、自分の好い相談對手ができたやうな心强さもあつた。

## 三十八

殘暑が漸く衰へかけて來た頃、體質の脆弱かつた幼兒の武之助が腸を惡くして、入院した時分には、照子は萩原と可也込入つた關係に陷つてゐた。
本宅の方においてある最近の女などが氣にかゝつてくると、照子は夜中に千鶴子をつれて押かけて行つたりして、岩辻や松子の氣を惡くさせたが、仲働きといふ觸れ込で來てゐたその女は、晝間より針仕事などをしてゐる離房めいた別室の方に寢かされ

てゐた。柊などの葉の生茂つた、日當りのわるい路次庭に面したその部屋で、彼女はよく一人で仕事に坐つてゐた。二十六にもなつて、家の事情から片着くこともできずにゐたといふ彼女は、色の白い小肥の體に、まだ處女らしい水々しさをもつてゐたが、氣がつまつてくると、勝手の方へも出てきて、上方に近い訛のとれない辭で、人々と話を交へてゐるのを、照子は時々見受けた。その弟は、岩辻の知つてゐる或株屋の店に勤めてゐた。

「私のところへも些とお遊びにいらつしやい。」

照子は不幸なその女を憐れむやうに言をかけたが、女は照子と調子を合せるには、餘りに世帶じみてゐた。

「どうせ自分の技倆ですることですから、私は何とも言ひません。それにあの人は感心に氣立がいゝから氣に入つてゐるんですよ。皆ながあの人のやうな心掛でゐてくれると、家も誠に圓く行くのだけれど……。」



松子はさういつて、蔭で讃めてゐたが、照子の耳にはそれが不快に響くのであつた。

朝の早い松子は、八時頃から寢床について、家のなかに起つたことは何一つ知らずにゐるやうな風であつたが、千鶴子の聲には直に目がさめて、蒸暑い蚊帳のなかから起出てしくると、緣側へ出て彼女に話をしかけた。

「今夜は暑くて寢られないから、ぶらぶやつて來ましたの。」

照子も香水くさい身體をして、緣側へ來て坐つてゐたが、岩辻のどこにゐるかゞ解らなかつた。

「千鶴子來たか。」

と云ふ彼の聲が、二階の方から、薄暗い庭の方へ落ちて來た。明りが微にそこから庭木の先へさしてゐるのが、見あげられた。女と二階でまだ涼んでゐるらしく思へた。

「厭な人。」

照子は鼻で笑つたが、女の使つてゐるらしい團扇の音が、はた〳〵と聞えて、何やら低い話聲が耳についた。

「照、お前もこつちへ上つて來たら如何だ。こゝは大變に涼しい。」

岩辻が暫くしてから聲をかけた。

「厭ですわ。そんな處へ行く必要はありません。」

照子は應へて、薄暗い岐阜提灯の灯影を眺めてゐた。

「ねえ千ちやん、厭なお父さんだわね。」

照子はいら〳〵するやうな氣持を、壓潰すやうにして言つたが、やつぱり熟としてゐられなかつた。

廣い二階の部屋へあがつて行くと、青蚊帳を透して、廊縁の方にゐる二人の姿が、薄明に透けてみえた。棒縞の浴衣を着た束髪の女は、廣袖の寢衣をきて、籐椅子に腰かけてゐる岩辻の足下の方に、體を崩しかけて坐つてゐた。蚊帳のなかゝら、白い敷



布や枕が、くつきり目に映つた。

「どうぞ此方へ。何てお暑いんでせう。」女は意ひのほかづう〳〵しいやうな調子で、端の方へ座蒲團を持出してくれた。

「今時分お邪魔をして、飛んだ御迷惑ですね。」

照子はつか〳〵と縁側の方へ出て行くと、わざと落着はらつて二人のなかへ割込んで行つた。

## 三十九

口の達者な照子は、そんな場合に岩辻に負けてばかりはゐなかつた。そして散々彼をいぢめぬいたところで、直りとそこへ坐込んで動かなかつた。女はいつか下へおりて、千鶴子の傍へ行つてゐた。

「それぢや私の身の立つやうにして下さい。」

照子は終ひに喧嘩腰になつて言出した。長いあひだ、岩辻の言出を拒んでゐた當初の自分の立場を譲つたことが、今になつて彼女の心に古創のやうな痛みを感じさせて來た。最初にゐた社會から、兎も角も足を洗はせられてから、岩辻と今のやうな關係に陷ちるまでに、照子母子は今一層有利な保護を、彼から受けやうと望んだのであつた。どんな甘い言を以つて、十六や七の自分が、彼に說き從はせられたかゞ、この頃になつて分明解つて來たやうな氣がした。

「一體お前はそれ以上、如何すればいゝと言ふのだい。」

岩辻も笑つてばかりはゐなかつた。

「だから私を一生安心のできるやうにして下さい。」

「お前は此頃連にそんなことを口にするが、誰かに敎唆されてゞもゐるのぢやないかい。」

「誰に敎唆されるものですか。私はいつまでも子供ぢやありませんわ。貴方のやうに好



きな眞似をされゝば、いくら暢氣な私でも少しは考へますわ。」

「私はお前が今そんな事を言出す氣が知れないね。それは私もお前に財產を分けるくらゐのことは考へてはゐる。だが今私の手を離れたら、お前たちは忽ち元の長屋住ひの貧乏人に零落れてしまふだらう。それとも何か好きな男でも出來たといふのかね。それで私の世話になつてゐるのが厭になつたとでもいふ譯なのか。」

「莫迦なことを言つちや困りますわ。この人の目の多いなかで、そんな事ができるか出來ないか、考へてみたら可いでせう。」

「偶然としたら、お前は此頃體を惡くしてゐるかも知れないね。それでなくて然う焦慮する理由がない。若し然うだつたら、早く醫者に診てもらつた方がいゝ。」

「お蔭で體は此頃大變丈夫ですの。」

夜か段々更けて來た。下の岐阜提灯も消えたとみえて、先刻まで袖垣のあたりへ射してゐた灯影が消えて、細い蟲の音が傳はつて來た。千鶴子が寢てしまつたらしく、

下座敷の方も閑寂してゐた。
女が寂しげな顔をして、上つて來た。
「もう遲いからお前たちは早くおやすみ。已はちよつと出て來る。」
岩辻は女に羽織を持つてこさせると、それをはをつて、紐を結びながら下へおりて行つた。女は當惑したやうな顔をして、彼を下まで送り出した。
「きつと貞子さんの處よ。」
女があがつて來た時、照子は長い頸をすくめてにやりと笑つたが、何だか胸がすくやうな氣がした。
外はもう閑寂してゐた。秋めいた輕い白雲が空に動いて、星の光がみづ〳〵してみえた。
溝の水のちよろ〳〵と流れてゐる細い通を、家の方へ歩いて行くと、曲り角のところに岩辻らしい男の影が此方へ動いてくるのが、目に映つた。窓をあけてある家が、



まだ少しはあつた。
「可けない可けない、あの人に怨まれるから。」
照子は男の前を通過ぎて、ぐん〳〵歩き出してみせた。忍返の尖端のすく〳〵透けてみえる自分の家の板塀が、すぐそこに見えた。

## 四十

翌朝目がさめると、照子はそんなにまでして引張つて來た岩辻に對して、自分のした事が、全然意にもない作り事でゞもあつたか何ぞのやうに、興味のさめてゐるのを感じたが、岩辻の移氣な心が、自分を中心として動いてゐるに過ぎないことが突止められたやうにも感ぜられた。
夜おそくまで照子は財産のことや、他の女の事について、眠がつてゐる岩辻を苛んだり、駄々を捏ねたりした。

うと〳〵してゐる岩辻の胸の上へ、彼女の纖細な體がのしかゝつて行つたり、ヒステリカルな目が、彼の心の底を撈りあてるやうに薄氣味わるく輝いたりした。簪を逆手にもつて、それを男の吭元へ擬したりした。

「まるで狂氣のやうだ。」

岩辻は終に笑つてばかりもゐられなかつた。何處までが冗談で、何處までが眞劍か分らないやうな女の擧動が、厭はしく思へて來た。選擧事件以來續いてゐる慢心から來た興奮が、彼女の頭腦を全く調子はづれにしたやうに思へた。

「私の家の方のことは、貴方は少しも心配してくれない。」

岩辻は此頃になつて照子が時々口にしてゐる山村の繼嗣問題などについて、終に照子から條理だつた不平を聞かされたが、二人とも全く飽き疲れて眠に陷ちたのは、明方近い頃であつた。

今の照子の住居と、衣裳や調度一切のほかに、一萬圓ばかりのものを、照子の私有



財産として今から決めておいても可いと云ふことが、その時岩辻の口からふと洩れた。

「お前がもし私に對して、體面を傷つけるやうな事さへしてくれなければ、それだけの物はいつでもお前の所有ときめておいて可い。」

岩辻は懈い目を睜りながら、さう言つて極りわるさうに、俛いてゐる照子の横顔を眺めてゐた。

「左に右お前は默つて、私を信用してゐればそれで可い譯なのだ。今日あの銀行で、私が人に立てられてゐるのも、私に信用があるからだ。」

岩辻はさうも言つて、照子を宥めた。

岩辻を送出してから、照子はその話をしながら母親と朝飯の膳に向つてゐた。

祕密な貸金のいきさつなどから、しげ〳〵逢ふ機會を作つてゐた萩原のことが、岩辻と一緒にゐる時の照子の頭腦に、甘い痛みとなつて殘されてゐるのが感ぜられたが、

一週間ばかり財政整理上の用向で、神戸の方へ出向いてゐる彼のその後の消息が氣かりであつた。

「あの人にそんな事を頼んで、若し間違ひでも起らなければ可いがね。」

母親はその當時、照子に注意したのであつたが、照子は萩原が、金にかけては全く潔白な、俠氣のある人間だと云ふことを、母親の前にも主張してゐた。そして晝間一二度岩辻の留守に訪ねて來たその男の出入を、ひどく氣にかけてゐる母親に、二人のなかの關係の、全く潔いことを言明した。

「それにあの人には、お上さんがあるんですよ。そんな事でも耳に入つたら、あの人が怒るわ。」

照子はさう言つて、母親の辭を打消し〳〵して來たが、やつぱり其男の出入りすることが憚られた。

午後に照子はその男が歸つたか否かと思つて、外で電話をかけて見た。



## 四十一

照子は祕密な貸金の取立方などを頼んだ前後に、それらの用事で萩原に一二度手紙を書いたことがあつたが、その手紙には是まで經驗したことのないやうな彼女の心の動搖と興奮とが現れてゐた。妻戀にゐる時分に、隣にゐた青年などに感じてゐたやうな淡々しい戀が、長いあひだ蹂躙られて來たはてに、二十五六になつた此頃の頽廢しきつた心に、力强い芽を張つて來たかとさへ思はれたが、そんな經驗に富んでゐるらしい此男によつて、照子は岩辻などには求められないやうな、面白い世界が見られるやうな氣がした。

「私はほんとうに滿らない身のうへです。私は籠の鳥のやうな境遇にゐる女です。少しばかりのお金の問題にも、こんな窮屈な思ひをして、岩辻や傍の人達に氣兼をして日を暮さなければならないのです。」照子はそんなやうな文句を、何とはなし唆られる

やうな氣持で書くのに、蕪雜ながらに、些しも流暢と自由を缺かないほどの筆を持つてゐた。

萩原の細君の口入で、照子は嵌めあきて厭になつてゐた若向の指環などを引受けてもらつた、萩原の知合の家へ、そこで花などを引くことにしてゐる萩原と一緒に遊びに行つたことがあつた。

五十年輩のそこの主人夫婦は、十五六になる養女と女中との四人暮しで、勤めさきを退いてからは、怠屈しのぎに骨董をいぢつたり、いくらか下地のあつた音曲道樂のために、師匠に出稽古をしてもらつたりしてゐるやうな身分であつた。

照子は琴を二三曲ひかされてから、車で送らうと云ふのを、强ひて斷つて萩原と一緒に涼しい夏の夜の町を、ぶら〳〵歸つて來た。その通路には、白粉くさい藝者屋町などがあつた。媚めいた音締の音などが、微かに表へもれて來た。

照子は娘か何ぞのやうに自分を待遇してくれた老人たちの樂しげなその家を出て來



て、今までに覺えたことのないやうな浮々した幼々しい心持になつてゐた。

褄を取つて、さは〳〵したやうな歩行ぶりで、道を横つてゆく仇めいた若い藝者の姿などが、不思議に彼女の目を惹いた。

「堅苦しい琴なんかより、三味線の方がどんなに面白いかしれない。」

照子はあれ以來振顧つてみようとも思はなかつた色町の氣分に、ふと自分の今の遣瀬ない心持がしつくり合つてゐるやうな氣がした。あの女たちの世界が、自分の今の境涯より、どんなに自由で面白いか知れないと思はれた。

「やつぱりあの社會にゐて、一花咲かせてみたかつた。」

照子はそんな事を考へながら歩いてゐた。

濠端の暗い木蔭の道へ二人は入つてゐた。涼みに出てゐる人の姿が、小高い丘の傾斜面の木の根や、坂の上のロハ臺のあたりなどに、まだちら〳〵見えてゐた。道端に荷をおろしてゐる甘酒屋の行燈なども見えた。

「今からだつて、私はおそくないと思ひますわ。」
照子は暗い道を、蓮葉にあるいてゐた。
「それは意外だ。あなたのやうな人か、そんな事を考へるなんて。だつて貴女ぐらゐ岩辻さんのために貞淑な人はないと、私は信じてゐたのです。」
「貴方にもさう見えるでせうか。」
照子は笑ひ出した。
「それあ私だつて、あの人には隨分世話になつてゐますからね。だけど、私がそんな事を考へたつて、格別不思議はないんでせう。私だつて一度は藝者にならうと思つたことがあるんですもの。」
「でも貴女はそんな柄ぢやないでせう。どう見ても貴婦人といふ柄だ。」
「私がそんなに野暮にみえて？」
二人は嶮しい坂を、山の方へ攀ぢて行つた。



## 四十二

その晩おそく車で送られて歸つて來た照子は、疲れた頭腦にまだ醉つたやうな興奮が殘つてゐたが、千鶴子のことについて、些とした感情の縺あひから、松子と言爭ひをした果に家を飛出しで、萩原に呼出をかけると、二人で芝浦の方で半日遊んで歸つたのはそれから二三日經つた或日のことであつた。
海風の吹く涼しい二階の部屋で、湯からあがつた二人はばさ〳〵した浴衣姿で、冷い麥酒などを飲みながら、寢轉んで話してゐたのであつたが、照子は時のたつのをも知らずに男に心を惹き着けられてゐた。するうち暑い日射が、日覆ひの白布のうへに薄れて、飲み食をしたり、碁石や枕の取散らかつた部屋のなかに、夕暮の寂しい影が這ひよつて來た。海のうへには帆影や煙が靜かに動いて、沖の方は早や夕濛靄が立罩めて來た。照子は放縱な一日の遊びに、まだ飽足りないやうな寂しさが、ひし〳〵と胸

に迫つてくるのを感じた。
照子が萩原の擇んだそこへ入つて行つたときは、彼の姿がまだ何處の部屋にも見られなかつたが、一時間の餘も待つてゐるうちに、やつと彼の聲が、懸離れたその部屋の廊下に聞えた。
「如何しても脱けられない用事がありましてな。」
萩原はさういつて、前のめりに冠つてゐた帽子を床の間におくと、頸と脇の下の汗をふきながら、照子の顔を眺めて、
「一體どうしたんです。また何か揉合があつたんですか」などと訊いた。
照子はまだ帶も解かずに、そこにきちんと坐つてゐたが、初めてそんな場所で一緒になつた男の物狎れたやうな調子に、驚きもしなかつた。
「今度はもつと面白いところへ行きませうよ。」
そこを引揚げるとき、照子は鏡の前で、顔や髪を直しながら言つた。



「こんな處は人目が多くて不可いから、どこか異つたところへつれて行つて頂戴。」
照子は甘えるやうに言つた。
海はいつか一面に深い水煙に包まれて、覺束なげな漁火が、遠くの方に微に見えてゐた。
二臺の俥を仕立てゝそこを出てからも、照子はまだ一日囁きかはしてゐた男の辭が心に絡はりついてゐるやうに感じたが、男の俥が別の道へそれてしまつてゐるのに氣がついた時分には、彼女はもう新橋あたりまで來てゐた。柳の綠や美しい店飾に反映してみえる大通の華かな灯影が、一日部屋に閉籠つてゐた目には、目眩しいほど明るかつた。
その晩照子は岩辻に引張出されて、町へ散歩に出かけたが、不安な今日の樂しさに浸つてゐるやうな彼女の心が、時々自分を見る岩辻の目に怯えた。
「今日は朝から氣がむしやくしやして爲方がないから、方々遊んで來ましたの。」

照子はさう言つて、岩辻の問に應へておいたのであつたが、やつぱり男の目が可怖かつた。

「些と覗いてみよう。此頃はどんなのが出てゐるか、薩張聞いたことがない。」

寄席の前へくると、岩辻は照子を振顧つて言つたが、照子も思ひ出したやうに、その賑かな場所に心を引かれた。

暑苦しい場内には、人の影が疎らであつた。二人は後の方に席を取つて坐つたが、調子はづれの高い糸の音や、甲高な聲調も、照子には何の刺戟も與へなかつたが、語られてゐるおしづ禮三の戀なかには、いつとはなしに心が惹着けられて、しんみりしたやうな氣持で聞くことが出來た。

御簾がおりたとき、照子は自分の目の潤んでゐることに氣がついた。

「昔しの人は、みんなあんなに人情深かつたんでせうか。」

照子は膝を崩しかけて、岩辻に私語いたが、彼に同感のないのが物足りなかつた。



## 四十三

そんな事が度重なつてから、萩原が神戸の方へ立つときには、照子は萩の枝葉の面白い意匠に成つた指環などを、すんなりした彼女の細い指にはめてゐた。そしてお盆に萩原の腕で半金ばかり取立てゝ來た例の祕密金で、彼女は男のために可也な金をかけて身裝を拵へてやつたりした。澤の夫人の知つてゐるその債務者の若い醫者と、萩原はそれまでに幾度となく會見してゐた。

切立の夏のインバネスなどを着込んだ萩原と、照子は前後して新橋の構内へ入つて行つたが、立つ前に、萩原のすぐ近くに選ばれた祕密の會合所で逢つたときの話に、神戸にも一人懸合ひの女があるらしい口吻を洩らしてゐた萩原を、そのまゝ手放してしまふのが不安であつた。旅客の立込んでゐる停車場のざわぐしした氣分が、彼女の旅行慾を唆つた。岩辻と一緒に行つた數年前の長い旅が憶出された。夢のやうに見て

來た大阪あたりの町や盛場の様子などが、ぼんやり目に浮んで來た。
「私も鎌倉あたりまで一緒に行きませうかしら。」
照子は男の買つた切符を眺めながら呟いた。
「鎌倉には雪子さんが行つてゐるんだから、私ちよッとあの人にも逢ひたいし……。」
「それならそれで早く切符を買はなくちや駄目だ。」
照子は萩原に急立てるやうに言はれて、周章て切符の賣場へ駈つけた。
客車のなかには、誰も知つた顔が見えなかつた。二人は隅の方に席を取つて、不安な思ひで汽車の出るのを待つてゐたが、眼鏡をかけた照子の目が、絶えず窓の外を通つて行く人達の顔に注がれた。千鶴子と同じ年頃の美しい女の子をつれて乘込んで來た、肥つた西洋人の立派な姿などが、彼女の目をひいた。子供は金髪を垂して、粗末な白い服を着てゐたが、紅でもさしたかと見える切長の目に、強い情慾のおどんでみえるやうな母親の服装は可也美しかつた。腕環頸飾などが、きら〳〵光つてゐた。



頸や頸のあたりに、美しい肉の盛あがつたやうな大きい顔に、時々につこり笑つて、子供の方を振顧いてゐたその異人は、汽車の進行と共に貧相に痩せた一人の連の婦人と、色々の表情まじりに話をしてゐたが、横濱あたりへ來たときに、彼女は幾箱か買込んで來た包を釋いて、亞鈴にくるまつた菓子を三個取出すと、それを慈愛深さうな目をして、一つを子供に與へ、二つを自分たちに剝いてお行儀よく食べてゐた。
子供は綺麗な齒に、それを少しづゝ嚙つてゐた。くり〳〵した大きい目が、よく動いた。それが照子に近頃全く頭腦から消えてゐた千鶴子たちのことを憶出させてゐた。
「どうせ松子さんに取られる子供だと思つてゐるせゐか、格別可愛いと云ふ氣もしませんけれど、でもやつぱり考へますわ。」
照子は呟きながら、窓の外を眺めてゐた。
停車場近くの松原陰が、すぐ見えて來た。いつか家族たちと一緒に來たことのある

その停車場の廣場を二人は肩を並べて小町の方へ歩いて行つた。

時間は日の暮れるまでに、三時間とはなかつた。長谷の方を、そつちこつち馬車で乘廻したり、江の島で飲食をしたりしてゐるうちに海がもう暗くなつてしまつたのに氣がついた。それで二人は東と西へ袂を分つたのであつたが、照子が汐風によごれ窶れた顏をして、家へ歸りついたのは十時近い頃であつた。

## 四十四

電話をかけた時、萩原は直ぐ電話口へ出て來た。電話は近所の酒屋の店にあるので、照子は餘り内容のある通話を、そこで交すのを憚らねばならなかつた。

萩原は昨夜歸つたといふのであつた。

「私今日は少し嬉しいことがあるのよ。」

照子は笑ひながら話しかけた。



「神戸の方の都合は如何でした。」

照子は暫くしてから、其事を聞いてみた。最初萩原の金主であつた、神戸の或大きな洋物店の女隱居のところへ、彼は財政上の事について、相談に行つたのであつたが、幾分は成功したが、神戸も不景氣續きなので、思ふやうに金策も出來なかつたと云ふのが、電話口での萩原の返辭であつた。

立つ前にも行つたことのある、萩原の近所の家が、その時にも會合の場所として指定された。

照子は女の目などの多いその場所を餘り好まないのであつたが、然しそれ以前に一度行つた覺えのある郊外の或大きな家よりも、心が落着くやうに思へた。

「私かういふ風の家は嫌ひぢやないの。」

照子は意氣に造られた小室の幾個もある其家へ入つたとき、特異な部屋の作りなどに不思議な誘惑を感ずるのが物希らしかつた。

照子は今もその家を想像しながら、電話口を離れて歸つて來ると、急いで鏡臺に向つて髪をほどいた。鏡のなかには、眠の足りない顏の疲れが不快に映つたが、興奮したやうな皮膚に、美しい紅味がさしてゐた。照子は昨夜の物狂はしい自分の仕打から、岩辻に望んでゐたやうなことが到頭事實となつて彼の口から誓はれた事などを考へると、抑へがたい歡喜が鏡に映つてゐる自分の目のうちにも見えるやうに感じたが、萩原とのこの頃の關係などから岩辻に對する疎ましい心持が、强い根を張つて來たのが心苦しかつた。

「私はほんとうに濟まないことをしてゐる。」

照子は鎌倉から歸つて來てから、一度雪子に逢つたときにも、ふとこんな事を口へ出したことがあつた。

あの時照子は鎌倉で雪子にちよつと逢つて來るつもりであつたのであつたが、時間がなかつたので、あわたゞしい思ひで、萩原と別れて家へ歸つて來た。後で雪子に逢



つてみると、雪子はもう鎌倉にはゐなかつたのであつた。

雪子はその頃、良人と別れてゐた。情婦を家へ連れ込んで來りして、始終雪子を厭がらせたり泣かせたりしてゐた彼女の良人は、雪子の實家からの仕送りも絶えてしまふと、直に別れ話を持出して、照子もそのなかへ入つて、口を利いたこともあつたが、男は照子などの心持などでは、想像のできないやうな不人情な考へを持つてゐることが解つたので、未練氣のどこまでも附絡つてゐる雪子を說得して、到頭手を切らせることにしてしまつたのであつた。

照子は鎌倉でもし雪子に逢つたら、萩原のことを彼女にだけは打明けたいと思つたほどであつたが、その機會のなかつたのが、結句幸ひであつたやうに思へた。雪子に同情してもらひたいやうな感じと、判斷や忠告を得たいやうな氣持とが、混亂してゐたのであつたが、獨身になつてからの雪子の寂しさうな樣子を見ると、浮いた話を持出すのが、罪惡のやうに思へて、それ限になつてしまつた。

手ばしこく束髪に結ばれた髪に、きら〳〵した櫛などを挿すと、照子は箪笥の前で着替をしはじめた。淡い模様のみえる絽縮緬の長襦袢の肌觸が、餘熱のあるやうな足や手に心持よかつた。

## 四十五

出る先へ立つて、千鶴子をつれて松子がやつて來たり、花の先生を遇つたりしてゐるうちに時間がたつて、照子がいら〳〵しい思ひで漸と家を出ることのできたのは、もうお晝近くであつた。

「そんな事を言へば、私なんか如何するんでせう。貴女のやうな料簡でゐた日には、一日だつてあの家に辛抱してゐられやしないよ。」

松子はそは〳〵してゐる照子を捉へて、昨夜の厭味を言つた。

「私と貴女とは地位が異ひますわ、貴女は歴乎とした岩辻の夫人ですもの。」



照子も負けてはゐなかつた。

「私が貴女の地位なら、あの人が幾人女を持たうと、どんな我儘をしようと默つて見てゐるかも知れませんわ。」

「然うですかね。口は重寶なものですからね。」

松子は冷笑つた。

「それに私は子供のことを考へなくちやなりませんわ。」

押問答をしてゐるうちにも、照子は氣がじれ〳〵して來た。

「子供さへゐなければ、私は今日まで御厄介になつてゐませんわ。」

「何て言草でせう。」松子は孰へもつきかねるやうな顔をして、おど〳〵してゐる千鶴子を眺めながらヒステリカルな笑方をした。

「子供のことなら、貴女に心配かけやしませんよ。また子供のことを心配する人が、さうふら〳〵外を出歩くと云ふのも、可笑なものね。」

「でも私にだつて、用事がありますからね。彼人だつて代議士に出たからといつて、それで放擲りばなしにして置いて可いものでもないでせう。出れば出たで世間の交際が、一層大切になる道理だわ。」

「へえ然うですかね。私にはそんな事は解りやしません。まあ精々岩辻の名譽をあげて下さい。」

松子がさう言つて、ぷり〳〵して歸つてから、照子は急いで家を出たが、俥でいつもの家へ着いた時分には、萩原は待ち倦ねて二階の小室で大の字なりになつてぐうぐう寢てゐた。傍には麥酒の飲み差や、水菓子などが餉臺のうへに殘つてゐて、簾の外には暑い日がかん〳〵照つてゐた。醉つた萩原の額には汗が粒なりに入染出してゐた。

「私また松子さんと喧嘩してしまつたわ。」

照子は目をさました男の顏を見るといきなり然う言つて、涙含んだ目を膝の上へお



とした。

萩原は傍にあつた手拭で、顏や手を拭きながら照子の顏を眺めてゐた。

「貴女にも似合はない喧嘩なんか野暮ぢやありませんか。」

「でも色々煩いことがありますわ。」

「人の家といふものは、いづれそれは煩いこともあるでせう。本妻と妾とが角突合をするなんか、昔からのお定まりで、希らしくも何ともありやしませんよ。」萩原は事もなげに笑つて、「だが、貴女は餘所のお妾とお妾が異ふ筈なんですからな、傍が何を言はうと、澄してゐれば可いぢやありませんか。」

「それは私もさう云ふ自信はあるんですけれど、でも妾はやつぱり妾ですわ。澄してばかりもゐられやしないわ。」

照子は手巾で、眼鏡の下から眼角を拭いた。

「一體どんな問題です。何か事件がおきたんですか。私は今日は嬉しいことがあると

いふから、何か不意の儲けでもあつたのかと思つて、先刻から貴女の來るのを待つてゐたんです。」

萩原は不平さうに言つた。

「嬉しいことも有るにやあるの」照子はにつこりして見せた。

## 四十六

照子は自分に頒けられた財産のことを話してゐるうちに、いつか燥いだやうな調子になつて、此二三日中の出來事を、自分の手柄談でもするやうに話しだした。

「それなら何も悲觀することはない。」萩原も笑ひだして、「しかし其は確かなものですかね。」

「確かですとも。あの人は一時の氣安めや何かでそんな事を言ふやうな人ぢやありません。其代りあの人の名譽を傷けるやうな事は慎んでもらひたいと云ふ條件がつくの



ですわ。其だからといつて何も私を疑つてゐるて譯ぢやないの。岩辻は私を愛し切つてゐるんですから。」

「それにしても契約書ぐらゐ取つておく必要はあるね。」

「それも然うね。」照子は頷いた。「それにあの人も、私を愛してゐるとは言ふものゝ、以前のやうな熱はなくなつたやうだから。それは私にも解るの。私があの人の有になり切つてゐると思つてゐるからでせう。」

「それにしても、一晩のうちに一萬圓と云ふものを捲揚げてしまつた腕は凄いね。」萩原は犬齒の金齒を見せて笑つた。

照子は簪を岩辻の咽喉へ持つて行つた時の、自分の樣子や岩辻の表情を想出して、顏を赧めて苦笑した。

飯を食べるといふので、二人がそこを出たのはもう四時頃であつた。出る前に着替、かたぐ男が家へ用達しに行つたあとで、昨夜からの疲れの附纏つてゐる照子は、懈

い頭腦を抑へて、まだそこに横はつてゐた。窓から涼しい風がそよ〳〵と流れて、肌着などのじつとり汗ばんだ體が蘇るやうであつた。照子は横になりながら今日はじめて男が話しだした、神戸の女隱居と彼との關係などを、ぼんやり憶出してゐた。その頃から昵んでゐた今の細君と一緒になつたのは、その未亡人から商賣の資本になるやうな纏まつた金を引出して、東京へ出て來てから、大分經つてからであつた。

「私もこれで岩辻の前へ顏を出せない人間になつてしまつたからね。」

萩原は今もその事を言出して、自分を慚ぢてゐた。

「一緒になるなんてことは、思ひもよらない。これが若し世間へ知れゝば、私は社會から葬られて了はなければならない。」

この關係が、いつまで續くかと云ふ話が出たときに、萩原は然う言つて、目の色を直してゐたが、照子もいつにない遣瀬のない思ひがされて、打萎れてゐた。

「私もほんとに濟まないと思ふことがあるわ。」



照子も眼鏡をはづした目をうるませながら言つた。

「でもあの人が、無理に私に言ふことを肯せたことを思へばね。夫も私一人ぢやないんですもの。」

町からは豆腐屋の喇叭の聲などが、照子の耳に物哀しく聞えて來た。照子は長襦袢のまゝで、蒲團のうへに膝をくづして、頭髪を直してゐた。そこへ昵みになつた年增の女がお茶をいれ替へて、持つて來てくれた。

「今日はそれでも大分お涼しうございます。」

女はお世辭を言ひながら、湯の湧いたことを告げた。照子はこの女にも、ちよいちよい過分の心附をしてやつてゐるので、何時とはなし自分の使つてゐる女のやうな氣持で、物を言ひかけることが出來た。

湯殿は廂と廂と向合つた、薄暗い場所にあつた。照子は裏梯子の方から、そこへ降りて行つた。

湯からあがつて、女が持つてきてくれた鏡臺に向つて顏を作つてゐるうちに、電氣が來た。照子はいくらか頭腦が分明して來るのを感じた。

## 四十七

戻つて來た萩原の手には、書類の一杯つまつた折鞄が提げられてゐたが、出る先へたつて彼は急にその中から公正證書のやうなものや、二三通の手紙などを取出して、莨を吸ひながら膝の上で擴げてゐた。

「如何したの。」

照子もさう言つて、傍からその書類を覗きこんでゐたが、店を抵當に借入れてある債務の處分などについて、彼が頭腦を惱ましてゐたことは、神戸へ立つ前から照子も薄々聞知つてゐた。照子は店がそれで維持できるものなら少しくらゐは自分の貯金のうちから融通してもいゝと云ふことを、口に出しても言つてゐたが、萩原はそれを好



まないらしい口吻であつた。しかし神戸で拵へて來た金は、旅費や何かを引去ると、正味手につくものは幾許もないほどの少額であつたので、彼は今その金策の爲めに必死に運動しなければならぬ場合に立つてゐた。負債の口は一つや二つではなかつた。長いあひだの株の失敗と、店の缺損などに原因する破綻が一時に蔽被さつて來たのであつた。

「今日はまあそんな話はしまいと思つたけれど、實は私も恁うしちやゐられないので……。」

彼はそれらの書類を鞄のなかへ仕舞ふと、立つときにも着て行つた羽織の襟などを正しながら起あがつて、目深にパナマを冠つた。

しやり〳〵した髯の伸びかゝつた顎から頸へかけての樣子などが、照子の目にはひどく窶れてみえた。

「まあ爲方がなければ、どうぞ宜しきやうにといふので、店を投出して了ふ分のこと

です。しかし然うなるまでは未だ間があるから、そのうちに何とか片がつきませう。」

途々もそんな話をしてゐたが、するうちに彼はいつかも照子をつれて行つた知合の家の直ぐ近くにある料理屋の方へ足を運んでいつた。日暮方の町には大分秋めいた風が吹いてゐた。空の色や雲の影にも時候の變り目のあわただしさが見えた。

「私と貴女とのあひだに、さういふ金錢問題や利慾沙汰があつては面白くないから、私は最初からそんな問題は持出さないつもりでゐたのです。」

萩原は飲食をしてゐるうちも、こんな事を口にしてゐた。

「そりや其方が可いんですけれど、私だつて然云ふことは默つて見てゐられない性分ですから。」

照子はその問題に、可也深入りして來たことに氣がついてゐたが、やつぱり乘出していかない譯にはいかなかつた。

二時間ばかりたつと、萩原は好い心持に醉つてそこを出たが、照子には家までの俥



を仕立てゝ玄關口で別れた。彼は少し儲口があるから、その用事で寄道をするのだといつて、例の知合の家の方へ歩いていつた。

俥で暗い濠端を通つて行く照子の頭腦は、先刻家を出たときよりも一層混亂してゐた。複雜な萩原の生活の測りがたいのも不安であつたが、自分に對する男の態度にも淡い疑ひの雲が湧いてきた。

照子は疾に手のついてしまつた自分の貯金と、男とを引較べて考へたりした。

「こゝで可いから降して下さい。」

雪子の家の傍まで來たとき、照子は急に彼女が懷しいやうな氣がして、急いで俥をおりると、通りの方から二三町入込んだその家の方へ歩いていつた。微醉がまだ顏に殘つてゐた。



## 四十八

雪子は同棲したまゝで、まだ籍も入れずにあつた良人と別れてから、世帯を疊んで、郷里の父親の昔の主人筋にあたる或華族の別荘の方へ行つてゐたのであつたが、そこにも長く居る瀬がなくて、東京へ歸つてくると、これも昔からの知合の或寡婦の家に同棲してゐた。

照子が薄暗いその玄關口に立つたとき、雪子は下の部屋で話をしてゐるらしかつたが、出て來た人は五十に近いその寡婦であつた。

雪子の話によると、三四年前まで下宿屋をしてゐた其婦は、勤人であつた良人に別れてから、腐れかゝつてゐたその下宿を人に貸して、子息と二人で、その屋賃と少許りある財産とで、細々暮してゐるといふのであつた。何をしてゐるか解らないのらくら子息が一人あつて、それが月に二三度は小遣などを強請りにやつて來てゐるのを、雪子は時々見かけた。

「餘り氣がくさ〳〵するから、私貴女に逢ひに來たのよ。」



照子はさういつて、香水をぷん〳〵させながら、汚い六疊の茶の間を通つて、二階へあがつて行つた。

「貴女でもそんな事があるの。」

雪子は散かつたそこいらを取片附けながら、髪などの亂れて蒼白い顔をしてゐる照子を不思議さうに眺めた。

「えゝ有りますとも。かう見えても私はなか〳〵苦勞性なのよ。」

照子は窓際の壁に懈い體を凭せかけて、溜息を吐いてゐた。

「あれから如何して。」照子はお茶をいれてゐる雪子に訊ねた。床には琴などが立かけてあつて、机のうへに教科書や雜誌などが、きちんと揃へてあつた。

「口が見つかつたの。」

雪子は獨身生活をする決心で、教員の口を捜してゐたのであつた。

「口はありさうですけれど……如何でせう、また野村が今日やつて來たのよ。」

「へえ」と、照子は惘れた顔をして、「あれ程立派な口を利いておきながら、また遣つて來るなんて……何といつて來たの。」
「何てこともないんですけれど、私に濟まない事をしたから、別れるには別れたけれど、今後何彼の力にならうと、そんな事を言つてゐるんです。」
「お金にでも困つて來たから、そんな事を言つて、また貴女を瞞さうとしてゐるのよ。」
照子は冷笑つたが、雪子は赤い顔をして、俛いてゐた。照子の目には男がつい今までこゝに坐つてゐたものらしく思へて來た。落着きのない雪子の樣子にも、部屋の模樣にもそれが、歷々と見えすいてゐた。男の甘い私語が、まだ雪子の耳に殘つてゐるらしく思へた。自分の坐つてゐる蒲團にも、野村の體の溫熱があるやうで、不快であつたが、男の方へまた惹き着けられて行つたらしい、雪子の弱い心が同情された。
「そんな事も言つたわ。」雪子は極惡さうに俛いた。



「さうでせう。お金の無心に來たのよ、急度。」
「それに此頃は會社の方も罷めてるんですつて。だから尙困るんですつて。それも自分が私に薄情な眞似をした罰だなんて、そんな事を言つて後悔してゐるのよ。」
「後悔だか何だか知れたもんぢやありやしない。その手で、また貴女を瞞さうといふんです。どこまで圖々しいか知れやしない。」
「さうでせうか。」
雪子は目のうちまで紅くして、太息をついた。

## 四十九

照子は一生敎育家で暮すなどゝいつてあれほど立派な口を利いてゐた雪子が、いつか男の誘惑にかゝつて、決心の鈍つてゐるのが可哀さうでもあり、腹立しくもあつた。二人を別れさすときにも、雪子の肩を持つて、男を糞味噌に貶しつけたことが、莫迦

莫迦しいやうに思ひ出された。
「貴方も男の端くれなら、雪子さんと立派に別れておしまひなさい。」
照子はその時さんざ脂を取つてから、さう言つて男を遣込めた。
臆病な男は萎れたやうな顔をして默つてゐたが、顔には冷笑の色がみえてゐた。
「雪子がそのつもりなら、私は別れても可いです。しかし雪子は恐らく私と別れることを、心から悅んではゐないでせう。後で後悔するでせう。」
男はさう言つて、俛いて薄い髭を捻つてゐた。
それで男はその晩のうちに、その家を出て行つてしまつたのであつたが、翌日になつて少許りあつた荷物を受取りのために下宿から人をよこした。雪子は家を疊んで荷物を今の家へ預けて間もなく鎌倉へ立つていつたが、鎌倉にも長く落着いてはゐられなかつた。
「貴女も懲々したからといつて、あれほど堅い決心をして別れた癖に、何だつてあの



男を此處へ上げたり何かするんでせう。」
照子はさう言つて詰つたが、雪子は極り惡さうに笑つてゐる限であつた。
「今度來たら逐ひ返しておしまひなさい。逢つちや駄目よ。また一緒になれとか何とかいふに決つてゐるの。」
「え、それあそんな事も言つてゐたわ。」
「それ御覽なさい。」
「一緒にならなければ、一生結婚の妨害をするなんて、私も何だか氣味が惡くなつて來ましたわ。」
「そんな事は脅しですよ。」
「え、ですから、私もそれは照子さんの前へ對しても出來ないと斷つてやりましたけれど、また氣毒なところもあるの。私に對しては、そんなに薄情な心も持つてゐないやうなんですから。」

「それは然かも知れないけれど……。」
照子はもうその問題に興味がなくなつたやうに、溜息をついた。
「何が何だか私には解らない。」
照子は萩原との最初からの關係を考へ出してゐた。逢ふ機會が重なるにつれて、段段溺れていつた自分の心持が、振顧へられた。雪子に餘り立派な口も利けないやうな氣がして來た。
「私も岩辻にはすまない事をしてゐるんです。」
幾度か打明けようとして、打明けられなかつた事を、照子は大分たつてから、雪子に言出した。
雪子は緊張した照子の顏を眺めたが覺れなかつた。
「貴女なんぞのは、親が不承知だと言つてみたところで、別に惡いことをしてゐる譯ぢやないでせう。」



照子は萎れた聲で言出した。
「あの人の品行がわるいから、不可いけれど、それも貴女が不幸だと云ふだけなのです。不道德とか罪惡とかいふんぢやないんですもの——私は濟まないことをしてゐるんです。」
「貴女が……まさか。」
雪子は漸といくらか感づいたやうな目色をした。
「でも眞實だから爲方がないぢやないの。」照子は冷い目に笑つてみせた。
「だけど、そんな事をしても可いの。」大分たつてから雪子は驚いたやうに言つた。

## 五十

照子はその晩、子供の武之助が大熱を發して、家中大騒ぎをしてゐる眞中へ歸つて行つたのであつたが、自分の祕密を洩らした時に吃驚して、疎ましいやうな顏をして

ゐた雪子の態度などを考へながら、頭腦が一層惑亂してゐた。
「貴女がよもやそんな事をしてゐやうとは思ひませんでした。」
雪子はさう云つて、照子の不謹愼な此頃の擧動を危み難ずるやうな氣色を見せてゐた。
「貴女には、迚も私の事情なぞは解らないでせうけれど……。」
自分のいさこさした事情や、苦しい不滿を話せば話すだけ、自分の痛みが募つてくるやうな氣がしたので、照子も終ひにさういつて、口を噤んでしまつたのであつたが、やつぱり氣がいら〳〵してゐた。
「岩辻さんに知れたら、貴女はどうする意なの。」
雪子はさうも言つて、照子の氣持を不思議がつた。
「その時は私だつて立派に決心します。岩辻だつて私に頭の昂らないことが澤山あるのですもの。」



照子は應へた。そして氣まづい思をして、外へ出たのであつたが、俥に乘る氣もしなくて、重い足を引摺るやうにして、下谷の方へ歩いて出た。
俥が一臺、看板をつけたまゝ、家の前に休んでゐた。近いてみると車夫は澤の抱へであつた。車夫の話で、照子は初めて武之助の病氣を知つた。澤とはいつかの貸金の一件などで、お互に氣色を惡くしてゐたのであつたが、尪弱い子供が係りつけてゐたので、往來は絶えなかつた。
「あの女も悉皆增長してしまつてゐる。」
澤の口から洩れた辭が、ふと耳へ傳はつてから、照子は成たけ近よらないやうな方針にしてゐた。
「お晝から武之助の樣子が、どうも變なので、近所のお醫者に診て貰つたけれど、何しろ熱が四十度もあるといふから、放擲つて置けないと思つて、松子さんに話をして、今澤さんに來て頂いたところです。」

奥から出て來た母親は、照子の顔を見ると、心配さうに然う言つて、提げてゐた氷嚢を勝手の方へ持つて行つた。

奥には松子や乳母やの顔がみえた。澤が今診察を了つて、不安さうな顔を鳩めてゐる人達に、病氣の重いことを言聽かしてゐる處であつた。

「どうも濟みませんでした。」

照子は入口から聲をかけた。

「雪子さんのところに、少し事件が起つたものですから、つひ〳〵お話が長くなりまして……私が出る迄には、何のこともなかつたんですがね、如何したんでせう。」

澤の目が眼鏡ごしに照子の方へ光つた。

「そんな事では不可んぢやないか。」澤は笑ひながら窘めるやうに言つた。

「今も言つてゐるんだが、この病氣は急に出た病氣ぢやない、子供に愛情があつたら、もう少し注意しないと不可ませんよ。」



「何の病氣ですの。」

「やつぱり腸だね。これは如何したつて入院ものだよ。私が是から歸りにちよつと寄つて、××病院へさう言つて行くから、熱が少し冷めかゝつたところで、直ぐお連れなさい。」

照子は乳母やの膝に抱かれて、ぐつたりしてゐる子供の側へ寄つてみた。額や手に觸ると、高い熱が火のやうに感ぜられた。愛らしい脣が乾き切つて、微かな息が漸と聞取れた。

「如何しても、少し手遲れましたね。」

頭腦の鬢を引詰めた束髪に結つて、目の釣あがつてみえる松子が、いつも尖がつてみえるやうな口を一層尖らせて、澤に私語いた。

「うまく助かれば可いがと、私も思つてゐる。」

「何しろが、かいがございませんからね。」松子は照子の顔をも見ないで、言つた。

# 五十一

病院へ擔込まれた子供を、病院の直ぐ傍に住んでゐた院長が、わざ〳〵出て來て診察をしてくれた後、灌腸などの手當をするやうに看護婦に吩咐けて歸つてから、照子はやつといくらか落着くことができた。

「大丈夫でございませうか。」

照子は晩酌の酒に、目のうちまで赤くなつてゐる博士に訊ねた。

病室には、岩辻も松子もついて來てゐた。博士の傍には、若い醫員が二人もついてゐた。小い患者は、乳母の手から離れて、ベッドのうへに安臥されてあつた。

「さあ少し樣子を見なければ解らんが、病勢はとにかくもつと進む。」

摯實な博士はさう言つてまた容態書を見てゐた。彼は岩辻の質問にも同じやうな調子で答へて、ぞろ〳〵とついて出る助手たちと一緒に出て行つた。



「ちつと放心つたな。」

岩辻は誰を責めるともなしに、半見離されたやうな患者の顏を、痛ましげに眺めてゐた。脊の低い松子もその傍に默つて突立つてゐた。

忙しい患者の息遣ひが、廣い靜な病室に聞えるきりであつた。氷を割る音などが、夜更の廊下の方から傳はつて來た。

「急度私が癒してみせます。私の一心でも此子を丈夫にしてやります。」

照子は興奮したやうな調子で言つたが、局外者のやうにして見てゐる松子の態度は飽足りなく思へた。

「それぢや今夜はお前が一人附いてゐることにするか。」

灌腸がすんでから、岩辻は時計を見ながら言つた。灌腸器をもつて來た看護婦に怯えて、甲高な聲で啼き立てゝゐた患者は、またうと〳〵と眠りかけてゐた。

夜の早い松子は、もう眦さうな目をして、次の間の疊敷のうへに坐つてゐたが、旋